

2 ASEAN貿易の新成長トライアングル ～中・越・米の分業とベトナムの課題～

大木 博巳 *Hiromi Oki*

(一財) 国際貿易投資研究所 研究主幹

要旨

ASEAN貿易は、世界輸出に占めるシェアで1990年の3.9%から2020年には7.5%へと拡大した。この間、日本のシェアを追い抜き、米国と並ぼうとしている。ASEANの貿易発展は、シンガポール、マレーシア等のASEAN先発国が主導してきたが、リーマンショック以降には、ベトナムなどのASEAN後発国に交代している。

ASEAN貿易は、1980年代後半から1990年代では、ASEAN先発国を輸出拠点として対欧米製品輸出・対日部材輸入の三角構造（トライアングル）が、ASEAN貿易発展の原動力であった。

ところが、リーマンショック後に、ASEAN貿易のトライアングルは、ベトナムを輸出拠点として対米製品輸出・対中（及び韓国）部材輸入という新たなトライアングルがASEAN貿易成長の牽引力となっている。

米中の経済対立や台湾海峡を巡る地政学的リスクが長期化すれば、中国に輸出拠点のサプライチェーンを置くリスクを高め、輸出拠点の脱中国の動き（チャイナ+1）を促進することになる。その受け入れ先としてベトナムをはじめとするメコン地域が有望となろう。メコン地域は、中国の産業集積地と陸続きで隣接しており部材資材の調達で利便性が高い。他方で、メコン地域がASEAN貿易の新成長トライアングルに発展するには、課題も多い。

ベトナムの地形は、丁度、中国の沿海部を切り取った形と似ている。人口規模はベトナムが9,850万人（2021年）と1億人弱、これに対して中国沿海部には5億人超と中国の5分の1以下である。中国沿海部でも割安な

労働人口の供給を持続的に供給することは難しく、賃金も上昇し始めたことで、製造拠点は内陸部に移管した。人口ボーナスの盛りにあるベトナムも、こうした局面を迎えることになる。ベトナム一国の限界を補うのが、ASEAN加盟国との生産分業の促進、とりわけメコン地域における生産ネットワークの構築である。ASEANの経済統合の真価が問われる。

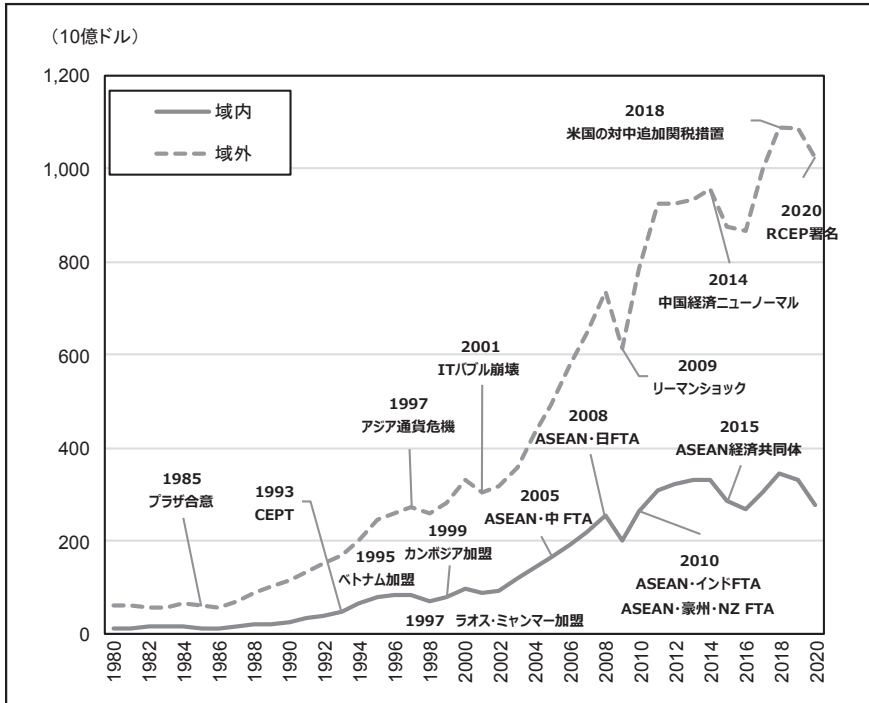
1. ASEANの貿易発展

ASEAN域外貿易が牽引力

ASEAN貿易（輸出）は、1980年の720億ドルから2020年には1兆3,040億ドルと40年間で18倍増と拡大している。ASEAN貿易の長期トレンドを見ると、貿易を下押しする危機に直面しながらそれを乗り越えて発展してきている（図1）。アジア通貨危機、ITバブル崩壊、リーマンショック、中国の経済成長鈍化（ニューノーマル）、2018年の米国の対中追加関税措置と2020年のコロナのパンデミック化等が、ASEAN貿易は大きく落ち込ませている。

ASEAN貿易は、大別してASEAN加盟国間の貿易（域内貿易）と加盟国以外の諸国との貿易（域外貿易）に分けることができるが、ASEAN貿易に占める域外貿易のシェアは、ほぼ一貫として、8割前後を占めている。ASEANの域外貿易発展の嚆矢は、1980年代後半に活発化した日本企業のASEAN投資である。日本の製造業の対東アジア投資は、アジアNIES（台湾、韓国、香港、シンガポール）、タイやマレーシア等ASEAN先発国、中国という順序で、その投資先をシフトさせ、さらにその順序が東アジアの高成長地域の変遷におおむね符合している。85年のプラザ合意以降では、まず85年から87年まではアジアNIESが日本から最大の製造業投資対象地域であった。88年以降、ASEAN先発国がこれに代わり、95年には中国がASEANを上回り、対東アジア製造業投資全体の約45%という最大のシェアを持つに至った。日系企業など外資主導で拡大したASEANの域外貿易は、1997年のアジア通貨危機で足踏みした。2000年代には、中国のWTO加盟が梃子となり対中貿易という新たなフロンティアが登場して一段の飛躍を遂げている。

図1. ASEAN（10か国）のASEAN域内・域外輸出額の推移



資料：IMF：Direction of Trade Statistics (DOT) 2021年11月

一方、ASEAN域内貿易では、1992年にASEANは、AFTA（ASEAN自由貿易地域）を創設し、翌年（1993年）に共通効果特惠関税（CEPT）協定を発効させた。域外貿易に偏重していたASEAN貿易に域内貿易発展の道筋を作った。1990年代には、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、ラオスのメコン地域の後発国がASEANに加盟し、ASEANの加盟国は10か国となった。アジア通貨・経済危機が発生した97年12月には、ASEAN創設30周年記念のASEAN首脳会議に日本と中国、韓国の首脳を招待し、第1回ASEAN+3首脳会議が開催された。ASEANを中心とする東アジアの地域協力・統合が始まった。2000年代に入り、ASEANは周辺国と5つのFTA（ASEAN+1）を締結し、東アジアの地域統合におけるドライビングシートの席を確保した。

2020年には五つのFTAを束ねるRCEPがインド除いて合意した。

ASEANの先発国と後発国の貿易成長率格差

ASEAN貿易の発展を、世界貿易（輸出）に占めるシェア推移と成長率でみたのが表1である。世界貿易に占めるASEANのシェアは1980年に3.9%（このうち域内が0.7%、域外が3.2%）、これが2020年には7.5%（域内が1.6%、

表1. ASEAN加盟国の世界貿易（輸出）に占めるシェアと輸出成長率

（単位：％）

国名	世界貿易に占めるシェア						平均伸び率				
	1980	1990	2000	2010	2018	2020	1980-1990	1990-2000	2000-2010	2010-2018	2018-2020
日本	7.1	8.5	7.4	5.1	3.8	3.7	8.2	5.2	4.9	▲ 0.5	▲ 7.0
中国	1.0	1.9	3.8	10.4	13.0	14.9	13.2	14.8	20.3	5.9	1.9
韓国	1.0	2.0	2.7	3.1	3.1	2.9	14.5	9.8	10.5	3.3	▲ 8.0
香港	1.1	2.4	3.1	2.6	3.0	3.2	15.3	9.4	6.8	4.8	▲ 1.4
台湾	—	2.0	2.3	1.8	1.7	1.9	0.0	8.4	6.1	2.5	▲ 0.9
ASEAN10	3.9	4.3	6.6	6.9	7.4	7.5	7.3	11.5	9.3	4.0	▲ 4.6
域内	0.7	0.8	1.5	1.7	1.8	1.6	8.2	13.7	10.3	3.4	▲ 10.1
域外	3.2	3.5	5.1	5.2	5.6	5.9	7.0	10.9	9.0	4.2	▲ 3.0
シンガポール	1.1	1.6	2.1	2.3	2.1	1.7	10.5	10.1	9.8	2.0	▲ 16.5
インドネシア	1.2	0.8	1.0	1.0	0.9	0.9	1.6	9.2	9.8	1.2	▲ 2.9
マレーシア	0.7	0.9	1.5	1.3	1.3	1.3	8.5	12.8	7.3	2.8	▲ 2.7
タイ	0.4	0.7	1.1	1.3	1.3	1.3	13.5	11.6	10.9	3.3	▲ 4.4
フィリピン	0.3	0.2	0.6	0.3	0.3	0.4	3.5	16.6	3.0	3.5	▲ 2.9
メコン（CLMV）	0.0	0.1	0.3	0.6	1.4	1.8	22.0	21.1	15.3	15.7	7.7
ベトナム	—	0.1	0.2	0.5	1.2	1.6	0.0	19.1	17.1	16.6	7.7
カンボジア	—	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	41.8	15.1	10.9	18.1
ラオス	—	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.0	18.9	14.7	5.4
ミャンマー	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	▲ 0.2	26.8	6.0	9.8	0.9
ブルネイ	0.3	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	▲ 7.0	2.6	12.0	▲ 3.7	0.3
インド	0.5	0.5	0.7	1.5	1.7	1.6	7.8	9.1	18.0	4.8	▲ 7.7
豪州	1.2	1.2	1.0	1.4	1.3	1.4	5.9	5.0	12.8	2.3	▲ 0.5
ニュージーランド	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	5.7	3.0	9.4	3.2	▲ 1.7
米国	12.1	11.6	11.9	8.4	8.6	8.2	5.9	7.0	5.2	3.4	▲ 7.3
EU28	43.1	44.9	37.8	34.1	33.6	33.7	6.8	4.9	7.8	2.8	▲ 4.8
その他	28.9	20.4	22.6	24.6	22.5	20.8	2.7	7.9	9.8	1.9	▲ 8.7
世界計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	6.3	6.8	8.9	3.0	▲ 5.0

資料：IMF；Direction of Trade Statistics（DOT）（2021年11月）

台湾：台湾中央銀行；国際収支細表（2021年11月）

シンガポールの再輸出：ITI；貿易マトリックス

域外が5.9%)と拡大している。この40年間で、ASEANは、日本を逆転して、米国に迫ろうとしている世界でも有数の貿易成長地域である。

ASEAN加盟国の貿易成長率は、2010年代には、ベトナムをはじめとしてカンボジア、ミャンマー、ラオスのASEAN後発国の成長率が、シンガポールやマレーシアなどのASEAN先発5か国を上回って伸びている。ASEAN貿易の拡大は、これまで先発国がリードしてきたが、2010年代に入ると、ASEAN先発国の輸出成長率が大きく鈍化する一方で、ASEAN後発国は10%台の伸びで拡大している。とりわけ、2018年から2020年間では、ASEAN先発国の貿易成長率がマイナス成長に陥っている中で、ASEAN後発国の成長率はプラス成長を維持し、一段と成長率格差が著しくなっている。

ASEANの国地域別貿易成長率

次に、2000年～2020年間における、ASEANの国・地域別貿易成長率（表2）を見ると、次のような特徴が指摘できる。

- ・ASEAN域内貿易では、シンガポール、マレーシア、ブルネイの貿易成長率が輸出入ともに鈍化する一方で、後発国は、先発国より比較的高い成長率を維持した。特に、2018～2020年間では、輸出・輸入ともにでは先発国と比べて、後発国は落ち込み幅が小さい。

- ・域外貿易の伸び率では、2000年代に中国、インド、ニュージーランド、豪州、韓国などASEANがFTAを締結した諸国との貿易が伸びた。ただし、対日貿易は、停滞している。リーマンショック後の2010年代には、域外貿易の成長率は鈍化するが、輸出では対中、対米輸出が比較的好調で推移し、特に対米輸出が回復した。輸入では、対中輸入が好調であった。

こうしたASEAN域内・域外貿易の成長率格差によって、ASEANの国・地域別構成比が変化している（表3）。ASEANの輸出に占める域内比率は2000年の23.0%（域外比率が77.0%）から、2020年には21.4%に低下している。特に、2018年から2020年の2年間で域内輸出比率が大幅に低下（2.7%減）した。これは、域内貿易の中核であったシンガポール、マレーシアのシェアが後退したためである。ASEAN域内貿易の比率は、2割強を占めるに

表2. ASEAN10の国・地域別輸出・輸入伸び率

(単位：％)

相手国名	輸出			輸入		
	2000- 2010	2010- 2020	2018- 2020	2000- 2010	2010- 2020	2018- 2020
ASEAN域内	10.3	0.6	▲ 10.1	10.7	0.8	▲ 9.8
ASEAN5	9.7	▲ 0.6	▲ 10.8	10.5	▲ 0.1	▲ 11.4
シンガポール	5.3	0.9	0.2	8.5	▲ 1.1	▲ 14.7
マレーシア	7.6	▲ 2.9	▲ 16.0	7.8	0.1	▲ 9.7
インドネシア	30.0	▲ 3.2	▲ 20.5	22.5	0.6	▲ 8.5
タイ	10.6	1.8	▲ 9.8	12.5	1.2	▲ 12.8
フィリピン	10.4	2.2	▲ 9.6	9.6	▲ 2.4	▲ 9.3
CLMV	17.0	6.4	▲ 7.6	16.8	9.3	2.1
ベトナム	17.4	6.1	▲ 5.4	15.3	9.5	▲ 2.7
カンボジア	20.2	6.8	▲ 13.7	17.2	20.5	45.1
ラオス	17.2	5.2	▲ 9.0	19.1	13.3	8.7
ミャンマー	12.1	7.8	▲ 6.0	21.7	1.0	▲ 2.8
ブルネイ	7.1	▲ 0.3	▲ 2.1	2.1	7.4	1.6
ASEAN域外	9.0	2.7	▲ 3.0	9.8	2.7	▲ 7.6
中国	21.3	6.3	1.9	21.3	8.6	▲ 0.4
日本	6.1	▲ 0.5	▲ 7.4	5.3	▲ 1.8	▲ 10.7
韓国	11.2	1.9	▲ 3.8	12.4	4.9	▲ 4.6
豪州	13.5	▲ 2.5	▲ 13.8	9.3	1.6	▲ 10.2
ニュージーランド	14.9	0.6	▲ 13.4	10.9	1.8	▲ 4.3
インド	17.0	0.1	▲ 14.2	19.2	2.3	▲ 9.8
米国	2.2	7.3	12.0	5.0	0.6	▲ 7.9
RCEP (-ASEAN)	11.6	2.7	▲ 3.0	10.9	4.5	▲ 3.9
CPTPP (-ASEAN)	7.8	▲ 0.2	▲ 7.7	6.0	▲ 0.9	▲ 10.3
EU28	6.1	1.8	▲ 8.0	8.2	1.2	▲ 11.5
ASEAN計	9.3	2.2	▲ 4.6	10.0	2.3	▲ 8.1

資料：IMF；DOT（2021年11月）

すぎず、域内市場統合を推進してきた割には伸びていない。

ASEAN貿易に占める域外貿易の比率は、2020年で輸出が78.6%。輸入が79.2%と2000年と比べて微増している。域外貿易の最大の輸出先は中国、次いで米国、輸入でも中国がトップで、次にEU、日本と続く。ASEANの輸入に占める対中シェアは、2020年に23.7%と2010年と比べて10.4%ポイント増と急拡大した。他方で、対米輸出が復活している兆しを見せている。対日貿易は、輸出入とも地盤低下が著しい。

表3. ASEAN10の国・地域別輸出・輸入構成比の変化

(単位: %)

相手国名	シェア				シェアの増減					
	2000		2020		2000-2010		2010-2020		2018-2020	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
ASEAN域内	23.0	22.5	21.4	20.8	2.1	1.6	▲ 3.8	▲ 3.2	▲ 2.7	▲ 0.8
ASEAN5	21.2	21.4	16.6	17.7	0.6	1.0	▲ 5.3	▲ 4.7	▲ 2.4	▲ 1.4
シンガポール	8.3	6.8	5.0	4.3	▲ 2.6	▲ 0.8	▲ 0.7	▲ 1.7	0.5	▲ 0.7
マレーシア	7.4	8.1	3.8	5.3	▲ 1.1	▲ 1.5	▲ 2.5	▲ 1.3	▲ 1.1	▲ 0.2
インドネシア	0.8	1.3	2.7	3.2	3.8	2.5	▲ 1.9	▲ 0.6	▲ 1.2	▲ 0.0
タイ	3.0	3.5	3.2	3.9	0.3	0.9	▲ 0.1	▲ 0.5	▲ 0.4	▲ 0.4
フィリピン	1.7	1.8	1.9	1.1	0.2	▲ 0.1	▲ 0.0	▲ 0.7	▲ 0.2	▲ 0.0
CLMV	1.6	0.8	4.7	2.9	1.5	0.7	1.5	1.4	▲ 0.3	0.5
ベトナム	0.9	0.6	2.7	1.9	1.0	0.4	0.9	0.9	▲ 0.0	0.2
カンボジア	0.2	0.0	1.0	0.4	0.4	0.0	0.3	0.3	▲ 0.2	0.2
ラオス	0.1	0.0	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.2	▲ 0.0	0.1
ミャンマー	0.3	0.1	0.6	0.3	0.1	0.2	0.3	▲ 0.0	▲ 0.0	0.0
ブルネイ	0.2	0.2	0.1	0.2	▲ 0.0	▲ 0.1	▲ 0.0	0.1	0.0	0.0
ASEAN域外	77.0	77.5	78.6	79.2	▲ 2.1	▲ 1.6	3.8	3.2	2.7	0.8
中国	3.8	5.0	16.0	24.1	7.0	8.3	5.2	10.8	2.0	3.6
日本	13.3	19.1	7.5	8.2	▲ 3.5	▲ 6.8	▲ 2.3	▲ 4.1	▲ 0.5	▲ 0.5
韓国	3.6	4.8	4.2	7.7	0.7	1.2	▲ 0.1	1.7	0.1	0.5
豪州	2.5	2.1	2.3	1.9	1.1	▲ 0.1	▲ 1.3	▲ 0.1	▲ 0.5	▲ 0.1
ニュージーランド	0.3	0.3	0.4	0.3	0.2	0.0	▲ 0.1	▲ 0.0	▲ 0.1	0.0
インド	1.8	0.9	2.9	2.1	1.7	1.2	▲ 0.7	0.0	▲ 0.7	▲ 0.1
米国	18.9	14.0	15.6	7.4	▲ 9.3	▲ 5.2	6.1	▲ 1.4	4.3	0.0
RCEP (-ASEAN)	23.5	31.4	30.3	42.2	5.4	2.6	1.4	8.2	1.0	3.6
CPTPP (-ASEAN)	17.4	22.5	11.9	11.3	▲ 2.3	▲ 6.9	▲ 3.2	▲ 4.3	▲ 0.8	▲ 0.6
EU28	14.9	11.1	10.6	8.5	▲ 3.8	▲ 1.6	▲ 0.5	▲ 1.0	▲ 0.8	▲ 0.7
ASEAN計	100.0	100.0	100.0	100.0	-	-	-	-	-	-

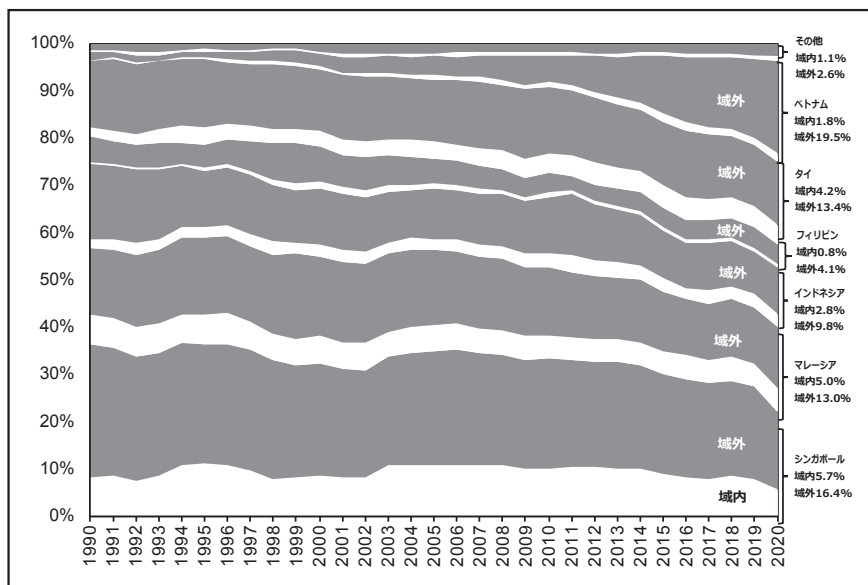
資料: IMF; DOT (2021年11月)

シンガポールの停滞、ベトナムの躍進

ASEAN貿易は、1980年代から2000年代初めまで、シンガポール、マレーシアなどのASEAN先発国が牽引力となり拡大してきた。特に、シンガポールが、ASEAN貿易の中心的な役割を果たしてきた。しかし、リーマンショック（世界金融危機）後には、ASEAN後発国のベトナムが台頭し、ASEAN貿易のリーダーが交代する動きを強めている。

図2はASEAN輸出に占める加盟国のシェアの推移を域内・域外別に1990年から2020年間でみたものである。輸出では、ベトナムのシェアが、2000年

図2. ASEAN10の輸出に占めるASEAN加盟国のシェア（域内・域外）



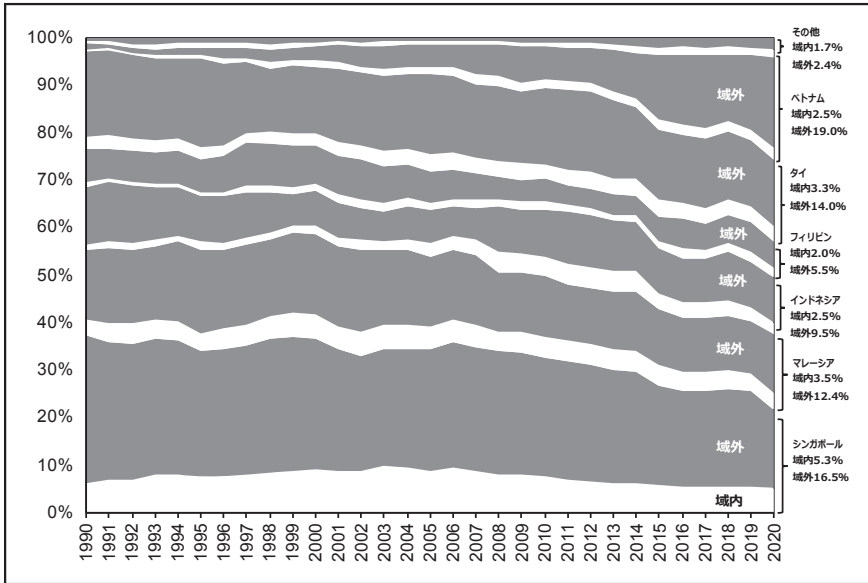
資料：IMF；DOT（2021年11月）

代初めから拡大し始め、2020年ではASEAN輸出の21.3%を占めて、トップのシンガポールの22.1%に迫っている。ベトナムの域外輸出だけを見ると、シンガポールを抜いている。

シンガポールの輸出には再輸出が含まれているので、実質ベトナムが最大の輸出国といえよう。ASEANの輸出に占めるベトナムのシェアは、2018～2020年間で4.6%ポイント増加している。また、ASEANの域外輸出に占めるベトナムのシェアでは、同じく2018年と比較して、5.1%ポイントの増加であった。シンガポールは、逆に、5.9%減と縮小している。

他方、ASEAN輸入でも、ベトナムのシェアは、2020年で21.6%、シンガポールの21.8%とほぼ並んだ（図3）。

図3. ASEAN10の輸入に占めるASEAN加盟国のシェア（域内・域外）



資料：IMF；DOT（2021年11月）

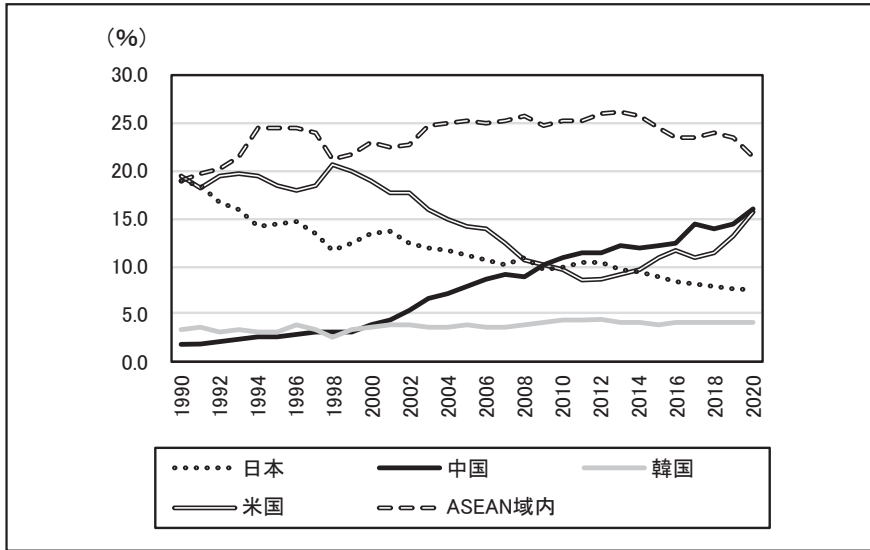
2. ASEANの新輸出大国 ベトナム

ASEAN域外貿易の変化

ASEANの輸出先は、1990年ではASEAN域内、日本、米国が主たる輸出市場であった。3本柱のうち対日輸出シェアは、1990年代を通じて低下し、ASEAN域内と対米輸出（1998年の20.6%がピーク）の2本柱となった、2000年代には、対米輸出が鈍化して対中輸出シェアが上昇し始める。リーマンショック後には、対米輸出シェアが一段と落ち込む一方で、対中輸出シェアが上昇して、米中逆転が起きた。ところが、対米輸出シェアは、米国が対中追加関税措置を発動した2018年の11.3%を底に、再び上昇し始め、2020年には15.6%まで回復し、対中輸出シェアの16.0%とほぼ同じ水準に追いついた（図4）。

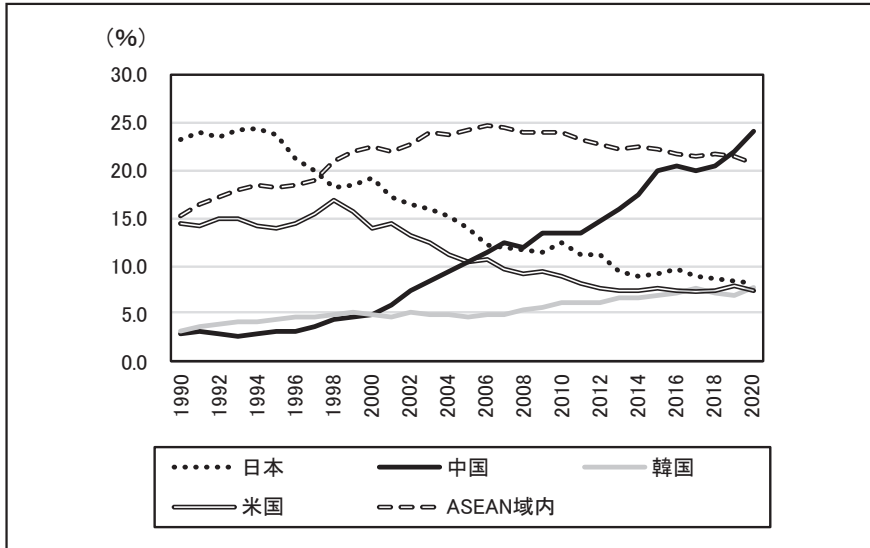
図4. ASEAN貿易に占める国・地域別シェアの推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

②輸入



資料：IMF；DOT（2021年11月）

一方、ASEANの貿易に占める対中貿易のシェアは、2000年以降拡大基調にある。対中輸出では、2000年の3.8%が2020年に16.0%、対中輸入では5.0%が24.1%と目覚ましい躍進を遂げている。ASEANの輸入に占める対中輸入のシェアは、ASEAN域内輸入のシェア20.1%を上回り、最大の輸入相手先となった。ASEANの対中貿易は、輸出入ともに、米国の対中追加関税措置以降でも堅調である（図4）。

目を覆いたくなるのは、前述したようにASEAN貿易における日本の凋落である。ASEANの輸入相手先としては、1990年代には日本が最大のパートナーであった。90年代末からはASEAN域内輸入に抜かれて日本は第2位に後退、2007年に中国に抜かれて第3位、2020年には韓国に並ばれた。輸出も同様に中国との差が開くばかりである。

米国の対中追加関税措置がもたらした変化

2018年に発動した米国の対中追加関税措置は、ASEANの対米輸出のみならず、対中輸出にも弾みをつけている。2018年から2020年間にASEANの貿易は、輸出で4.1%減、輸入では8.1%減と減少している。他方、ASEANの対米輸出は、12.0%増と著増、対中輸出も1.9%増と堅調であった（表4）。

前述したように2018-2020年間ににおけるASEAN加盟国の貿易成長率を比較すると、ASEAN先発国とASEAN後発国との間で貿易成長率に格差が生じている。例えば、輸出成長率は、ASEAN先発国の輸出成長率はマイナス、ASEAN後発国はプラスという明暗がはっきりしている。2018-2020年間ににおけるASEAN後発国のベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーの輸出成長率は、いずれもプラスを確保している。特に、カンボジアは18.1%増、ベトナムは7.7%増と伸びている。

ASEAN後発国の輸出が好調であった要因は、対米輸出にある。ラオスの対米輸出は減少しているが、カンボジアは32.4%増、ミャンマーは35.7%増、ベトナムは27.4%増と2桁の増加率を記録した。一方、ASEAN先発国では、タイが10%増と伸びたが、フィリピン、シンガポールは減少、インドネシアは横這い、マレーシアは7.4%増にとどまった。

表4. ASEAN各国の国・地域別輸出成長率（2018-2020年平均伸び率）

（単位：％）

国名	域内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	▲ 21.9	▲ 14.4	▲ 16.6	▲ 9.7	▲ 8.3	▲ 22.5	▲ 0.4	▲ 16.7	▲ 16.5
マレーシア	▲ 4.0	▲ 2.2	▲ 7.3	4.8	▲ 0.6	▲ 10.0	7.4	▲ 4.3	▲ 2.7
インドネシア	▲ 2.9	▲ 3.0	▲ 16.2	8.2	▲ 9.8	▲ 12.9	0.6	▲ 6.9	▲ 2.9
タイ	▲ 10.1	▲ 2.3	▲ 4.4	▲ 0.8	▲ 7.3	▲ 15.2	10.7	▲ 9.1	▲ 4.4
フィリピン	▲ 3.0	▲ 2.9	2.2	4.1	▲ 0.4	▲ 3.5	▲ 3.8	▲ 12.1	▲ 2.9
カンボジア	100.8	8.7	▲ 0.6	12.6	▲ 3.8	11.4	32.4	▲ 8.5	18.1
ラオス	8.7	1.8	▲ 12.0	1.7	20.7	▲ 65.2	▲ 14.1	12.5	5.4
ミャンマー	2.2	0.4	▲ 5.6	▲ 1.8	▲ 0.9	10.1	35.7	7.9	0.9
ベトナム	▲ 3.4	8.9	1.1	8.9	2.5	▲ 10.5	27.4	▲ 3.1	7.7
ブルネイ	19.9	▲ 8.5	▲ 13.9	123.3	▲ 52.2	▲ 15.8	14.2	▲ 46.5	0.3
ASEAN計	▲ 10.1	▲ 3.0	▲ 7.4	1.9	▲ 3.8	▲ 14.2	12.0	▲ 8.0	▲ 4.6

注. 網掛け部分：マイナス値の国・地域

資料：IMF；DOT（2021年11月）

表5. ASEAN各国の国・地域別輸入成長率（2018-2020年平均伸び率）

（単位：％）

国名	域内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	▲ 10.3	▲ 17.7	▲ 19.6	▲ 12.8	▲ 6.6	▲ 24.7	▲ 18.9	▲ 16.9	▲ 16.1
マレーシア	▲ 13.2	▲ 4.4	▲ 4.0	▲ 3.0	4.8	▲ 4.8	1.7	▲ 13.7	▲ 6.5
インドネシア	▲ 19.4	▲ 11.6	▲ 23.0	▲ 6.7	▲ 13.2	▲ 13.4	▲ 8.0	▲ 11.3	▲ 13.4
タイ	▲ 7.0	▲ 9.3	▲ 11.4	0.0	▲ 7.0	▲ 6.1	▲ 0.7	▲ 12.0	▲ 8.9
フィリピン	▲ 6.2	▲ 10.2	▲ 9.8	▲ 2.4	▲ 21.5	▲ 4.5	▲ 5.8	▲ 10.4	▲ 9.2
カンボジア	4.6	4.6	▲ 5.9	7.5	▲ 1.3	▲ 8.8	▲ 2.6	▲ 0.5	4.6
ラオス	▲ 9.0	0.3	5.0	2.9	▲ 22.9	▲ 13.9	28.2	▲ 7.7	▲ 6.0
ミャンマー	▲ 9.5	▲ 0.9	▲ 11.0	2.4	13.3	▲ 17.0	▲ 91.4	4.9	▲ 4.7
ベトナム	▲ 2.0	6.6	3.4	13.5	▲ 0.7	4.0	3.9	5.0	5.5
ブルネイ	23.0	8.4	2.3	▲ 40.7	5.9	3.4	▲ 9.5	59.2	13.4
ASEAN計	▲ 9.8	▲ 7.6	▲ 10.7	▲ 0.4	▲ 4.6	▲ 9.8	▲ 7.9	▲ 11.5	▲ 8.1

注・資料共に表6と同じ。

ASEANの対中輸出でも明暗がみられる。ASEANの対中輸出は微増にとどまったが、カンボジアは12.6%増、ベトナムが8.9%増と伸びている。ASEAN先発国では。シンガポール、タイが減少、インドネシアが8.2%増、マレーシアが4.8%増とベトナム、カンボジアほどの伸び率には及ばない。

輸入では、カンボジア、ベトナムの域外輸入が2018-2020年間で増加、中

でも対中輸入が伸びている（表5）。ASEANの対中輸入も0.4%減と微減にとどまっている。

前述したように、ASEANの貿易大国としてのポジションは、シンガポールからベトナムに交代する動きを強めた。ASEANの輸出に占めるベトナムのシェアは、2020年に21.3%、シンガポールの22.1%と僅差となった。シンガポールの輸出には再輸出が含まれているので、実質ベトナムが最大の輸出国といえよう。ベトナムの輸出が拡大しているのはASEAN域外輸出である。ASEAN域外輸出に占めるベトナムのシェアは、2020年で24.8%、2018年と比較して5.1%ポイント増であった。シンガポールは、20.8%で、2018年と比べて5.9%ポイントの減と縮小している。

ベトナムの輸出は、対中輸出、対韓輸出、対米輸出、対EU輸出においてASEANで最大、対日輸出は、タイに次いで第2位となっている。

一方、輸入でも、ベトナムは、ASEANの輸入に占めるシェアで2020年に21.6%とシンガポールの21.8%にほぼ並んだ。2018年と比べてベトナムの輸入は、5.2%ポイント増加している。輸出同様に、ベトナムの輸入は域外輸入が拡大しているためである。ベトナムは、ASEANの対中輸入、対韓国輸入で第1位、対日輸入ではタイに次いで第2位、対インド輸入はマレーシアに

表6. ASEAN各国の国・地域別輸出構成比（2020年）

（単位：％）

国名	城内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	26.7	20.8	14.2	19.8	24.1	19.8	15.5	19.4	22.1
マレーシア	23.4	16.5	15.0	18.1	15.1	19.5	12.8	16.3	17.9
インドネシア	13.1	12.4	13.9	15.2	11.9	27.8	9.2	10.5	12.6
タイ	19.7	17.0	23.0	14.2	7.7	14.5	16.7	14.8	17.6
フィリピン	3.6	5.2	10.1	4.5	4.6	1.5	4.8	4.9	4.9
カンボジア	1.4	1.4	1.1	0.5	0.3	0.2	2.6	2.9	1.4
ラオス	1.2	0.3	0.1	1.0	0.1	0.0	0.0	0.3	0.5
ミャンマー	1.6	1.2	1.3	2.6	0.8	1.9	0.4	2.3	1.3
ベトナム	8.3	24.8	19.6	23.5	35.0	14.0	37.9	28.7	21.3
ブルネイ	1.0	0.4	1.7	0.6	0.3	0.9	0.0	0.0	0.5
ASEAN計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：IMF；DOT（2021年11月）

表7. ASEAN各国の国・地域別輸入構成比（2020年）

（単位：％）

国名	域内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	25.3	20.8	14.7	13.1	13.4	16.4	31.1	32.7	21.8
マレーシア	16.8	15.6	14.9	14.2	11.5	23.7	18.7	15.4	15.9
インドネシア	11.9	12.0	10.9	13.7	7.4	15.0	9.7	11.0	12.0
タイ	15.8	17.6	28.4	17.3	8.3	17.2	16.6	16.9	17.2
フィリピン	9.6	6.9	8.8	7.1	7.4	6.1	7.8	6.6	7.5
カンボジア	3.1	1.3	0.7	2.5	0.6	0.5	0.3	0.7	1.7
ラオス	1.7	0.2	0.2	0.6	0.1	0.1	0.0	0.2	0.5
ミャンマー	2.8	1.1	0.6	2.3	0.6	2.7	0.0	0.8	1.5
ベトナム	12.2	24.0	20.8	29.2	50.6	17.9	15.4	15.1	21.6
ブルネイ	0.8	0.3	0.2	0.2	0.1	0.3	0.3	0.7	0.4
ASEAN計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：IMF；DOT（2021年11月）

次いで第2位となっている。

ASEAN域内輸入に占めるベトナムのシェアは、2020年に12.2％、インドネシアを抜いて第4位に浮上したが、シンガポールの25.3％と比べて半分程度である。

ASEANの国地域別輸出入依存度

ベトナムの輸出拡大は、ASEAN域外輸出に大きく依存している。ベトナムのASEAN域外輸出依存度は、2020年で91.6％、2018年と比べて2.0％ポイント増加して9割を超えた。ベトナムの最大の輸出先は、米国、次いで中国、EUと続いている。これらで6割を占めている（表8）。

ASEAN各国の輸出で、対米輸出比率が最も高い国は、カンボジアの30.0％である。また、対米輸出比率が対中輸出比率を上回っている国は、ベトナム、フィリピン、タイ、逆に対中輸出比率が対米輸出比率より高い国は、インドネシア、マレーシア、シンガポール、ラオス、ミャンマーである。ASEANすべての国で対中輸出依存度が高いわけではない。

一方、輸入では、ベトナムの輸入に占める対中輸入比率は、2020年で32.6％と、ミャンマー、カンボジアに次いで高い。また、ベトナムは対韓輸入

表8. ASEAN各国の輸出に占める域内・域外（国・地域別）比率（2020年）

（単位：％）

国名	域内	域外									世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	RCEP (-ASEAN)	CPTPP (-ASEAN)	EU28	
シンガポール	25.9	74.1	4.8	14.3	4.6	2.6	11.0	26.6	8.4	9.3	100.0
マレーシア	27.8	72.2	6.3	16.1	3.5	3.1	11.1	28.8	10.6	9.6	100.0
インドネシア	22.3	77.7	8.3	19.4	4.0	6.4	11.4	33.5	11.4	8.8	100.0
タイ	24.0	76.0	9.9	12.9	1.8	2.4	14.9	29.4	16.6	8.9	100.0
フィリピン	15.9	84.1	15.6	14.8	4.0	0.9	15.4	35.0	17.7	10.7	100.0
カンボジア	21.7	78.3	6.0	6.1	1.0	0.4	30.0	14.0	11.6	22.8	100.0
ラオス	54.9	45.1	1.8	31.3	0.7	0.0	1.6	35.3	4.3	5.6	100.0
ミャンマー	25.8	74.2	7.3	31.6	2.6	4.1	5.3	41.7	8.2	18.3	100.0
ベトナム	8.4	91.6	6.9	17.7	6.9	1.9	27.8	33.0	11.6	14.2	100.0
ブルネイ	40.2	59.8	25.6	17.7	2.1	5.3	1.1	50.5	30.7	0.1	100.0
ASEAN計	21.4	78.6	7.5	16.0	4.2	2.9	15.6	30.3	11.9	10.6	100.0

資料：IMF；DOT（2021年11月）

表9. ASEAN各国の輸入に占める域内・域外（国・地域別）比率（2020年）

（単位：％）

国名	域内	域外									世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	RCEP (-ASEAN)	CPTPP (-ASEAN)	EU28	
シンガポール	24.2	75.8	5.5	14.5	4.7	1.6	10.6	26.4	8.5	12.7	100.0
マレーシア	22.0	78.0	7.7	21.5	5.6	3.1	8.7	37.6	11.2	8.2	100.0
インドネシア	20.7	79.3	7.4	27.5	4.8	2.6	6.0	43.4	12.6	7.7	100.0
タイ	19.0	81.0	13.4	24.2	3.7	2.1	7.2	43.3	16.4	8.3	100.0
フィリピン	26.7	73.3	9.6	22.7	7.7	1.7	7.7	41.4	11.8	7.5	100.0
カンボジア	38.7	61.3	3.3	35.8	2.8	0.7	1.3	42.3	4.1	3.6	100.0
ラオス	64.5	35.5	2.4	25.4	0.8	0.5	0.4	28.9	2.8	2.6	100.0
ミャンマー	40.4	59.6	3.1	37.1	3.2	3.9	0.0	44.5	4.5	4.8	100.0
ベトナム	11.8	88.2	7.9	32.6	18.1	1.7	5.3	60.6	10.5	5.9	100.0
ブルネイ	38.1	61.9	3.1	10.8	2.1	1.4	5.5	21.7	9.1	13.6	100.0
ASEAN計	20.8	79.2	8.2	24.1	7.7	2.1	7.4	42.2	11.3	8.5	100.0

資料：IMF；DOT（2021年11月）

比率が18.1%と高く、対中、対韓輸入でベトナムの輸入の5割を超えている（表9）。

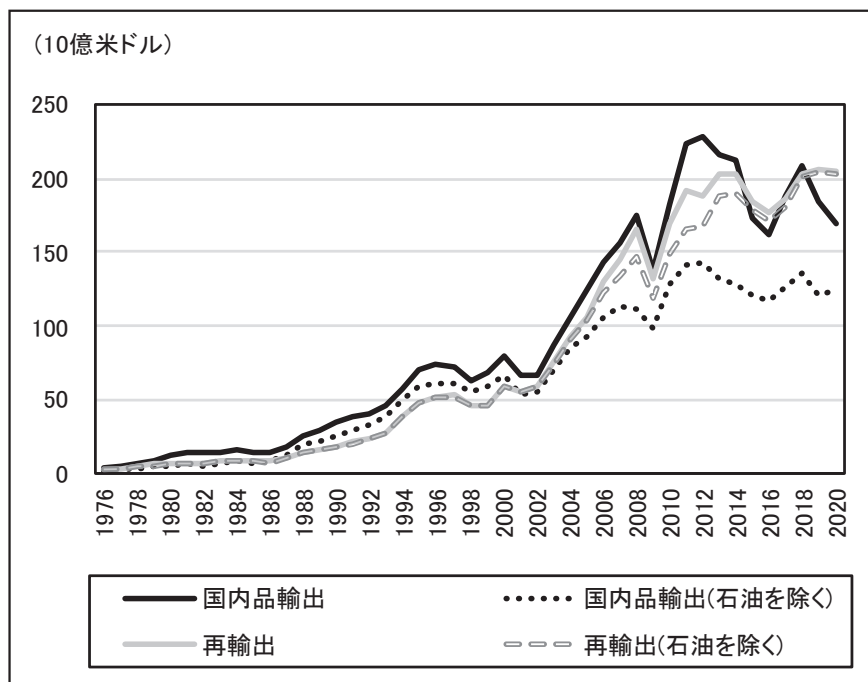
2018-2020年の2年間でベトナムの貿易が拡大したことで、ASEAN貿易に占めるベトナムの比率が高まった。

3. シンガポールの貿易停滞

シンガポールの国内品輸出と再輸出

シンガポールの貿易は、情報機器や化学品、石油製品等の国内品輸出と東アジアの物流拠点としての機能がもたらす再輸出に分かれる。1976年～2020年間におけるシンガポールの国内品輸出と再輸出の推移（図5）をみると、2016年までは、国内品輸出が再輸出を上回っていた。ところが、2018年から再輸出が国内品輸出を上回るようになってきている。さらに、国内品輸出を非石油製品輸出に限ると、2002年から国内品輸出は再輸出（非石油）を下回っ

図5. シンガポールの国内品輸出と再輸出の推移



資料：輸出入：ENTERPRISE SINGAPORE（2021年12月）

換算レート（期中平均）：IMF：International Financial Statistics（IFS）2022年1月

ている。リーマンショック後には、非石油国内品輸出が停滞する一方で、非石油品再輸出が拡大したことで差が広がっている。

シンガポールの非石油国内品輸出は、機械機器、中でもエレクトロニクス製品（主にHDD）輸出を牽引力にしていたが、2000年代に入り失速した。エレクトロニクス製品の国内品輸出は、2000年の452億ドルから2020年には280億ドルに減少している。主力輸出品であったHDDの生産拠点が、タイなどのASEAN諸国に生産が移管されたことや、情報機器生産がASEANから中国に集約されたことなどが影響している。

一方で、エレクトロニクス製品の再輸出は、338億ドルから1,060億ドルに拡大している。このエレクトロニクス製品の再輸出の7割弱を占めているの

表10. シンガポールの業種別国内品輸出・再輸出（2000・2020年）

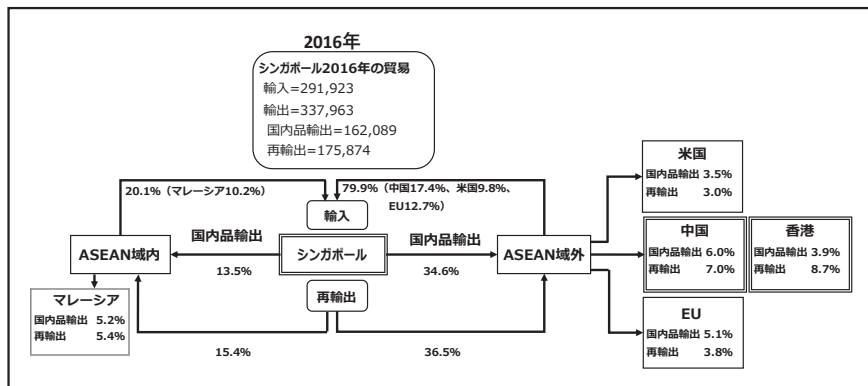
（単位：10億ドル）

	2000					2020				
	輸出計	国内輸出	再輸出	輸入	再輸出/輸入	輸出計	国内輸出	再輸出	輸入	再輸出/輸入
非石油	124.6	65.6	59.0	118.4	0.50	327.2	125.0	202.2	279.6	0.72
動物性・植物性油脂	0.2	2.0	0.0	2.0	0.21	0.2	0.1	0.1	1.5	0.06
飲料・タバコ	1.1	0.2	1.0	1.1	0.84	3.0	0.2	2.7	3.1	0.90
化学品	9.7	6.3	3.4	7.8	0.44	51.5	333.0	18.3	27.9	0.65
原料品	1.0	0.4	0.6	1.0	0.58	25.0	1.3	1.2	2.1	0.57
食糧・動物	1.8	0.8	10.0	3.0	0.33	9.6	8.1	1.5	8.6	0.18
機械・輸送機器	92.9	49.7	43.2	81.8	0.53	195.5	47.9	1,476.0	171.4	0.86
電子製品計	76.9	45.2	33.8	57.4	0.59	130.1	28.0	106.0	111.2	0.95
消費財	5.3	2.1	3.2	4.5	0.71	2.6	0.5	2.1	2.4	0.85
トランジスター	4.4	1.4	30.0	3.0	0.97	9.2	1.7	7.5	5.2	1.45
ハードディスクドライブ	12.7	9.4	3.3	3.7	0.87	2.1	0.4	1.6	1.4	1.18
集積回路	26.7	11.6	15.2	24.7	0.61	84.8	14.1	707.0	69.2	1.02
集積回路部品	2.0	1.3	0.7	2.0	0.35	1.5	0.5	1.0	2.4	0.39
PC部品	10.9	—	3.3	9.7	0.34	8.6	—	6.7	8.2	0.82
プリント基盤	—	7.6	—	—	—	—	1.9	—	—	—
PC	2.5	20.0	0.5	1.0	0.47	44.0	19.0	24.0	5.7	0.43
通信機器	2.9	1.8	1.1	2.3	0.48	11.5	1.6	9.9	11.6	0.86
その他製造品	18.0	8.1	9.9	236.0	1.46	64.9	34.1	30.8	64.9	1.35
石油	13.4	13.3	0.1	16.2	0.01	46.5	45.0	1.6	49.1	0.03
Total	138.0	789.0	59.1	134.7	0.44	373.7	169.9	203.8	328.7	0.62

資料：輸出入：ENTERPRISE SINGAPORE（2021年12月）

換算レート（期中平均）：IMF：International Financial Statistics（IFS）2022年1月

図6. シンガポールの国内品・再輸出額とASEAN域内・域外別シェア



資料：輸出入：ENTERPRISE SINGAPORE（2021年12月）、GTSより作成

換算レート（期中平均）：IMF：International Financial Statistics（IFS）2022年1月

が集積回路である。シンガポールの集積回路の再輸出先は、9割弱が域外輸出で、中国・香港が過半を占めている。ASEAN域内向けは1割超程度で、主にマレーシアに再輸出されており、ASEAN域内輸出の広がりには欠けている。

シンガポールの貿易に占める国内品輸出・再輸出の地域別比率は、2016年でシンガポールの輸出に占めるシェアで見ると、国内品輸出は、ASEAN域内が13.5%、域外が34.6%、再輸出はASEAN域内が15.4%、域外が36.5%である。国内品輸出、再輸出額ともにASEAN域外輸出が域内輸出の2倍以上の規模となっている（図6）。ASEAN域内輸出では、マレーシアが、国内品5.2%、再輸出が5.4%、域外では中国が国内品6.0%、再輸出が7.0%、香港は同じく、3.9%、8.7%と再輸出では香港が最大の輸出先、次に中国、マレーシアと続いている。

一方、シンガポールの輸入は、同じく2016年でASEAN域内が20.1%、域外が79.9%と8割弱を域外輸入が占めている。輸入の国別内訳は、マレーシアが10.2%、中国は17.4%、香港は3.5%、米国は9.8%、EUが12.7%、日本は7.3%と中国が最大の輸入先となっている。なお、2000年では、日本が16.3%とトップ、マレーシアが14.1%、米国が13.9%、EUが11.3%であったのに対して、中国は4.5%に過ぎなかった。

東アジア貿易の物流拠点、シンガポール

シンガポールは、ASEAN貿易の中核国である。特に、ASEAN域内貿易でシンガポールが占めるシェアは、2020年で輸出が26.7%を占め、シンガポール最大の貿易パートナーであるマレーシアの23.4%を合わせると、両国がASEAN域内貿易のほぼ過半を占めている（表11）。しかし、2000年にはシンガポールのシェアは38.3%と4割弱であったことを考えると、大きく後退している。特に、ASEAN域内貿易に占めるシンガポールとマレーシアの相互貿易のシェアが、2000年から2020年間で22.0%減と激減している。

表11. ASEAN域内輸出に占める各国のシェア（2020年）

（単位：％）

輸出国 \ 輸入国	シンガポール	マレーシア	インドネシア	タイ	フィリピン	CLMV	ベトナム	ASEAN計
シンガポール	－	9.5	6.1	4.0	2.1	4.8	3.5	26.7
マレーシア	12.2	－	2.5	3.9	1.5	3.0	2.6	23.4
インドネシア	3.8	2.9	－	1.8	2.1	2.3	1.8	13.1
タイ	3.4	3.1	2.7	－	1.8	8.7	4.0	19.7
フィリピン	1.3	0.6	0.2	1.0	－	0.5	0.5	3.6
CLMV	2.3	1.3	1.1	4.1	1.3	2.4	0.4	12.5
ベトナム	1.1	1.2	1.0	1.7	1.3	2.0	－	8.3
ASEAN計	23.5	17.7	12.6	14.9	8.9	21.8	12.8	100.0

注. 輸出ベース

資料：IMF；DOT（2021年11月）

表12. ASEAN域内輸出に占める各国のシェア増減（2000～2020年）

（単位：％）

輸出国 \ 輸入国	シンガポール	マレーシア	インドネシア	タイ	フィリピン	CLMV	ベトナム	ASEAN計
シンガポール	0.0	▲ 15.9	6.1	▲ 1.9	▲ 1.3	1.8	1.4	▲ 11.6
マレーシア	▲ 6.1	0.0	0.8	0.3	▲ 0.2	2.2	2.2	▲ 3.0
インドネシア	▲ 2.8	0.9	0.0	0.8	1.3	1.9	1.4	2.1
タイ	▲ 2.7	0.3	1.3	0.0	0.7	6.6	3.1	6.2
フィリピン	▲ 1.9	▲ 0.8	▲ 0.0	▲ 0.2	0.0	0.4	0.4	▲ 2.4
CLMV	0.7	0.8	0.8	3.3	0.8	2.0	0.2	8.6
ベトナム	0.2	0.8	0.8	1.4	0.8	1.8	0.0	5.7
ASEAN計	▲ 12.5	▲ 14.4	9.0	2.0	1.3	14.9	8.8	0.0

注. 輸出ベース

資料：IMF；DOT（2021年11月）

この要因として、第1にASEANの貿易成長地域がメコン（CLMV）に移っていることが挙げられる。ASEAN域内貿易に占めるメコンのシェアは、2000から2020年間で14.9%も増加している（表12）。特に、タイとCLMVの相互貿易のシェアが、2000年から2020年間で9.9%増と拡大している。

第2に、再輸出拠点としてのシンガポールの機能の縮小である。東アジアからの輸出に関し、シンガポールの流通センターとしての機能が、はるかに小さくなってきていると指摘されている^{注1}。シンガポールは主に集積回路をはじめとする電子部品の輸出のための流通センターとしての役割を果たしているが、ASEAN諸国は最近の10年間を見ると、この仲介国の役割に対する依存度を低下させている。マレーシアとフィリピンは、集積回路輸出のそれぞれ約20%と10～15%をそれぞれシンガポール経由で輸出している。

（2020/07/20 シンガポール、高付加価値型活動に注力し、交易拠点としてのポジションを確立The Business Times）

実際、マレーシアの半導体輸出を見ると、リーマンショック以前ではシンガポールが最大の輸出先であったが、リーマンショック以降では、トップは中国に代わり、2016年に対中輸出が落ち込んでシンガポールが追いついているが、対香港向けも同時に輸出が拡大している（図7）。

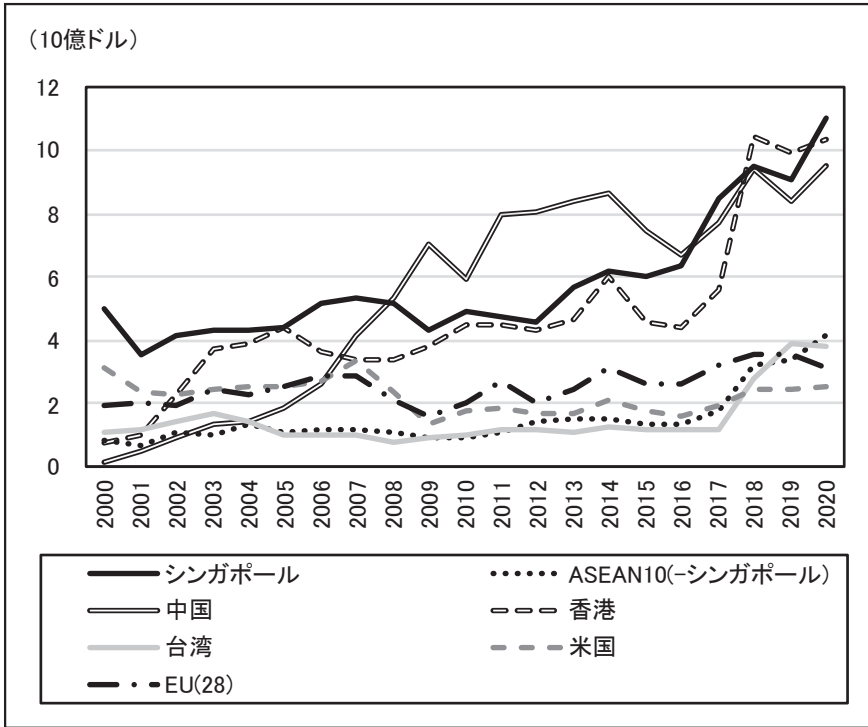
他方で、米中貿易摩擦を受けて、政治的に安定し、ビジネス環境が整備されているシンガポールを、電子製品の取引拠点として活用する動きが強まっているという指摘もある。特に、コロナ禍で発生した半導体不足への対応として、サプライチェーンの混乱を警戒した在庫積み増しが増えており、これがシンガポールの輸出・再輸出を加速させている^{注2}。

シンガポールには、世界でトップを争う半導体メーカーの多くが地域統括本部や研究開発センター、または高度なウエハー製造施設がそろっている。このことは、シンガポールがICの重要なグローバル流通拠点としての地位を固めることに貢献している。

東アジア依存を強めるシンガポールの輸出

シンガポールの貿易構造は、1990年～2020年間の変化でみると、輸出で

図7. マレーシアの集積回路輸出（国・地域別）



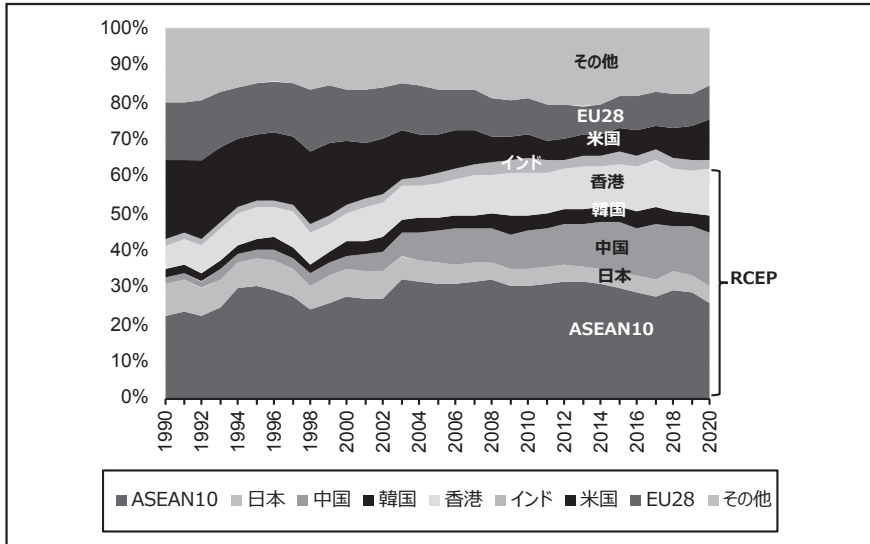
資料：マレーシア貿易統計よりITI作成

は欧米離れが進んでいる。シンガポールの輸出では、欧米市場向け輸出シェアが、1990年には36.9%を占めていたのが、2020年には20.3%に縮小している。中国+香港向けは、8.0%から26.6%に拡大している。ASEAN輸出シェアは、22.4%から25.9%に拡大しており、ASEAN域内貿易は安定している。RCEP向けの輸出シェアは、52.3%と過半を占め、これに香港を加えると6割を超える（図8）。

輸入では、日本から中国へのシフトが大きな特徴である。1990年には最大の輸入先であった対日輸入のシェアが20.1%から2020年に5.5%に縮小している。代わって対中輸入シェアが、3.4%から14.5%に拡大している。また、対

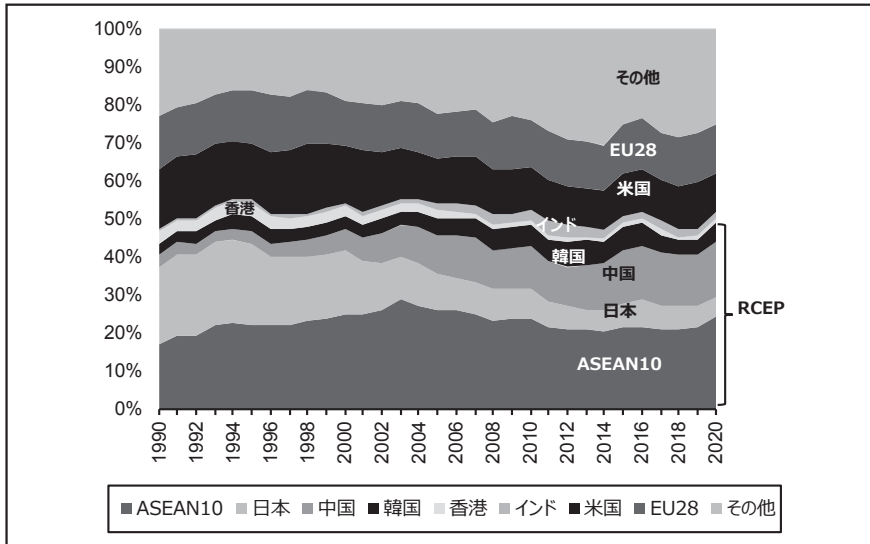
図8. シンガポールの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

②輸入



資料：IMF；DOT（2021年11月）

ASEAN輸入シェアも、17.1%から24.2%に増加している。一方、対米輸入シェアは、16.1%から10.6%、対EU輸入シェアは14.0%から12.7%に減少しているが日本ほどの後退ではない。

4. 対米輸出と対中輸入の連動性

米国の対ASEAN輸入の拡大

米国の対ASEAN輸入（ASEANの対米輸出）では、2018年から2020年間に
対ベトナム輸入が大幅増となった（表13）。米国の対ASEAN輸入に占める
ベトナムのシェアは、2018年の26.6%から2020年に34.4%と7.8%ポイント
も増加している。ASEAN先発国の輸入シェアが軒並み縮小させている中
で、ベトナムの躍進ぶりが際立っている。ベトナムと並んでシェアを増加さ
せたのがカンボジアである。米国の対カンボジア輸入は、労働集約財が7割
超を占め、特にアパレル輸入が大宗を占めている。米国の対ASEAN労働集
約財輸入に占めるカンボジアのシェアは、2020年で10.3%、ベトナム、イン
ドネシアに次いで第3位にあるが、今後数年でインドネシアを抜くことが予

表13. 米国の対ASEAN輸入構成比（財・国別）

（単位：％）

相手国	加工品			部品			資本財			IT製品			消費財			労働集約財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	27.2	30.1	30.2	21.9	12.0	9.0	24.6	10.9	12.1	18.4	8.4	6.0	5.6	8.1	8.4	0.3	0.1	0.0	16.2	14.3	13.3
マレーシア	24.5	13.9	14.5	41.4	47.5	44.8	36.2	25.2	16.6	40.1	24.0	14.8	8.9	6.6	7.6	5.8	3.3	4.4	24.0	21.3	19.1
インドネシア	17.1	17.8	14.5	5.5	3.4	2.9	3.7	2.8	3.1	3.4	2.3	2.9	22.1	16.8	13.9	26.3	18.5	14.2	15.3	11.3	8.7
タイ	15.9	15.6	12.8	16.4	15.1	16.9	24.9	27.7	22.2	28.8	30.1	25.2	23.2	13.8	12.7	9.0	3.9	3.7	21.1	17.2	16.3
フィリピン	7.7	5.0	3.9	12.4	11.4	8.1	7.9	8.0	4.8	7.5	7.5	4.9	5.0	3.9	2.7	5.5	3.5	2.3	7.4	6.8	4.8
カンボジア	0.1	1.0	2.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	5.7	5.2	6.7	10.0	8.2	10.3	2.1	2.1	2.8
ラオス	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.3	0.1	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0
ミャンマー	-	0.4	0.4	-	0.0	0.0	-	0.0	0.0	-	0.0	0.0	-	0.6	1.0	-	0.8	1.5	-	0.3	0.4
ベトナム	7.3	16.0	21.2	2.5	10.5	18.1	2.7	25.2	41.0	1.8	27.5	46.0	29.6	45.0	47.0	42.9	61.7	63.5	13.8	26.6	34.4
ASEAN (10)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注. 労働集約財：衣類（HS61-62）、履物及び部分品（HS64）、家具・寝具等（HS94）、がん具・運動用具（HS95）、革製品（HS42）の合計

資料：GTAよりITI作成

想できる。

米国の対ASEAN財別輸入の詳細をみると、際立っているのは、米国の対ASEAN資本財輸入である。米国の対ASEAN資本財輸入に占めるベトナムのシェアは、2018年の25.2%から2020年に41.0%に急拡大している。資本財の中でもIT製品（PC、携帯電話など）の対ASEAN輸入に占めるベトナムの比率が、2018年の28.0%から2020年には44.6%に著増している。次に、第2位のタイ、第3位がシンガポールと続いている。シンガポール、マレーシアはシェアを大きく後退させており、趨勢的には、ベトナムに集中する傾向が續くと見込まれる。

また、消費財でもベトナムの比率が高いが、特に、労働集約財では、米国の対ASEAN輸入に占めるベトナムの比率は2020年で63.5%に達している。これも、ほぼ、ベトナムに集約される傾向にある。米国の労働集約財輸入に占めるASEANの比率は、2020年で26.4%、中国は40.9%と中国が大きくリードしているが、ここ2年間で差が縮まっている（図9-①）。とりわけ、衣類輸入では、2020年にASEANが30.8%、中国が27.2%と逆転した。この逆転は対ベトナム輸入が急増しているためである（図9-②）。

表14. 米国の対ASEAN輸入依存度（財・国別）

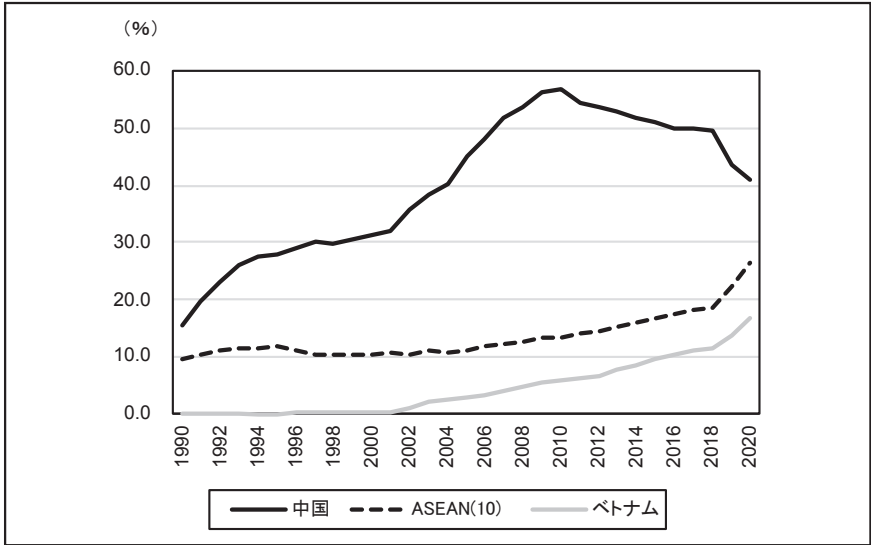
（単位：％）

相手国	加工品			部品			資本財			IT製品			消費財			労働集約財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	20.3	29.7	29.7	28.4	20.9	16.2	35.7	16.1	23.0	20.2	9.5	8.4	12.9	20.6	22.9	0.3	0.1	0.1	100.0	100.0	100.0
マレーシア	12.3	9.3	9.9	36.1	55.6	56.4	35.3	25.1	22.2	29.6	18.1	14.4	13.8	11.3	14.4	5.0	3.3	4.9	100.0	100.0	100.0
インドネシア	13.5	22.4	21.8	7.5	7.6	7.9	5.7	5.3	9.0	3.9	3.2	6.3	54.0	54.2	57.6	35.7	35.5	34.0	100.0	100.0	100.0
タイ	9.1	12.8	10.3	16.3	21.7	24.9	27.8	34.1	34.7	24.3	28.1	28.8	41.2	29.2	28.3	8.9	4.9	4.8	100.0	100.0	100.0
フィリピン	12.5	10.4	10.5	35.0	41.6	40.3	25.0	24.9	25.3	17.9	17.7	18.9	25.0	20.7	20.4	15.5	11.1	9.9	100.0	100.0	100.0
カンボジア	0.8	6.8	10.6	0.0	0.1	2.2	0.0	0.2	1.1	0.0	0.1	0.5	99.0	92.3	85.2	97.1	86.3	75.9	100.0	100.0	100.0
ラオス	32.7	25.0	27.6	1.2	0.1	1.3	0.1	58.4	29.4	0.0	58.4	28.9	63.8	11.2	35.0	57.2	8.5	16.3	100.0	100.0	100.0
ミャンマー	-	19.2	11.2	-	0.3	1.2	-	0.3	2.5	-	0.2	1.9	-	78.9	84.8	-	63.7	72.2	-	100.0	100.0
ベトナム	6.4	8.5	8.1	3.8	9.8	12.6	4.5	20.1	30.3	2.3	16.6	24.8	80.2	61.6	49.6	64.4	50.1	38.7	100.0	100.0	100.0
ASEAN(10)	12.1	14.2	13.1	21.0	24.9	24.0	23.5	21.2	25.4	17.7	16.1	18.6	37.4	36.4	36.3	20.7	21.6	21.0	100.0	100.0	100.0

資料：GTAよりITI作成

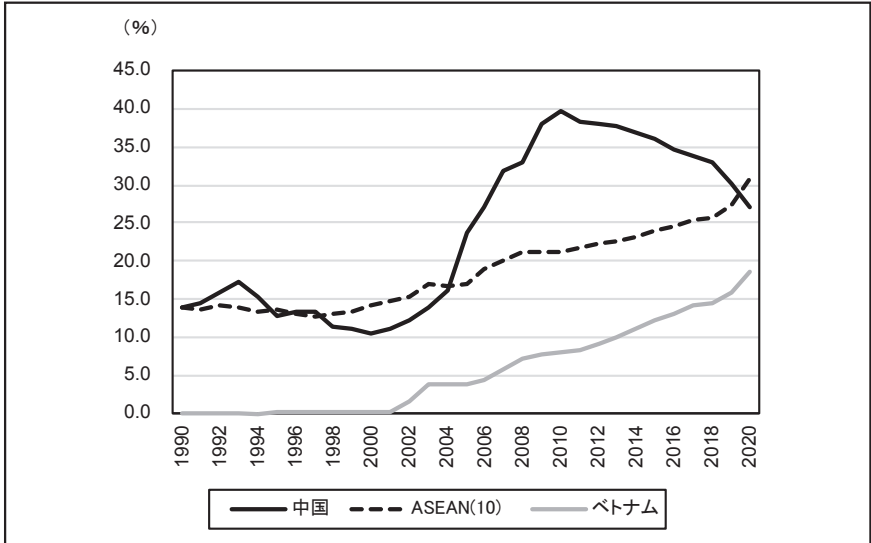
図9. 米国の労働集約財輸入に占める中国・ASEAN・ベトナムのシェア

①労働集約財計



資料：GTAよりITI作成

②衣類 (HS61-62)



資料：GTAよりITI作成

表15. 中国の対ASEAN輸出構成比（財・国別）

（単位：％）

相手国	加工品			部品			IT製品			資本財			消費財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	15.8	14.2	12.0	33.1	17.5	14.7	45.5	20.6	16.6	31.3	20.3	24.0	16.3	11.7	13.1	23.4	15.6	15.0
マレーシア	12.3	12.0	12.6	21.5	17.7	17.6	24.6	19.7	18.4	17.5	14.3	12.3	22.7	16.4	18.2	17.2	14.4	14.8
インドネシア	18.5	14.6	11.6	11.0	10.4	7.3	3.7	6.0	4.2	16.3	16.4	13.9	15.0	11.1	9.6	15.9	13.5	10.7
タイ	14.5	12.3	13.1	14.7	13.3	10.1	13.6	9.0	7.1	13.5	15.1	14.8	13.9	14.4	15.1	14.3	13.4	13.1
フィリピン	9.6	11.9	12.0	7.5	6.3	6.3	7.7	5.7	5.9	5.5	9.1	8.6	12.6	16.8	16.6	8.4	11.0	10.9
カンボジア	2.0	3.3	3.8	0.3	0.4	0.6	0.1	0.1	0.3	0.5	1.2	1.6	0.4	1.0	1.4	1.0	1.9	2.1
ラオス	0.2	0.5	0.5	0.2	0.3	0.2	0.0	0.1	0.1	0.3	0.7	0.5	0.9	0.2	0.2	0.3	0.4	0.4
ミャンマー	3.0	3.8	4.3	1.7	1.0	0.8	0.3	0.3	0.2	2.6	3.7	2.6	2.3	2.8	2.9	2.5	3.1	3.3
ベトナム	24.1	26.9	29.8	10.0	32.8	42.4	4.5	38.4	47.2	12.3	18.2	21.7	15.0	25.4	22.9	16.7	26.2	29.6
ASEAN (10)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：GTAよりITI作成

中国の対ASEAN輸出の拡大

一方、ASEANの対中輸入を中国の財別ASEAN輸出でみたのが表15である。中国の輸出に占めるベトナムのシェアは、2018年の26.2％から2020年に29.6％と僅か2年間で3.4％ポイント増加させている。財別には、中国の対ASEAN部品輸入に占めるベトナムのシェアは、2018年の32.8％から2020年に42.4％へと著増して、4割を超えた。同じく、加工品のベトナムのシェアは、26.9％から29.8％に増加、いずれも中国のASEAN輸出の中ではベトナムが最大の輸出先である。

中国の対ベトナム輸出に占める財別依存度は、2020年で加工品が35.8％、部品が32.9％と加工品が上回っているが、2018年と比較すると、加工品の依存度は低下し、部品の依存度が高まっている（表16）。

部品の中でもIT（情報機器）部品の比率が高い。中国の対ベトナムIT部品輸出は、2020年で中国の対ASEAN向けIT部品輸出の47.2％を占めている。2010年ではシンガポールが45.5％を占めていたが、現在では、かつてのシンガポールのポジションをベトナムが担っている。中国の対ベトナム輸出のうち、IT部品が、2020年で26.2％を占めている。2010年では僅か2.9％に過ぎなかった。

表16. 中国の対ASEAN輸出依存度（財別・国別）

（単位：％）

相手国	加工品			部品			IT製品			資本財			消費財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	24.0	37.3	28.4	26.1	22.6	22.5	21.0	17.4	18.1	37.8	27.3	32.7	12.3	13.7	17.9	100.0	100.0	100.0
マレーシア	25.3	34.3	30.4	23.0	24.8	27.5	15.4	18.1	20.5	28.6	20.9	17.1	23.2	20.7	25.2	100.0	100.0	100.0
インドネシア	41.2	44.3	38.8	12.7	15.5	15.7	2.5	5.9	6.5	28.9	25.4	26.7	16.6	14.9	18.4	100.0	100.0	100.0
タイ	36.1	37.4	35.6	18.9	19.9	17.6	10.3	8.9	8.9	26.7	23.6	23.1	17.2	19.5	23.4	100.0	100.0	100.0
フィリピン	40.8	44.3	39.1	16.6	11.6	13.2	10.0	6.9	8.9	18.6	17.3	16.2	26.6	27.7	31.2	100.0	100.0	100.0
カンボジア	71.2	72.5	64.7	5.0	4.2	7.1	0.8	0.8	2.4	15.6	13.8	15.2	8.1	9.6	13.3	100.0	100.0	100.0
ラオス	19.6	43.2	47.1	8.4	14.9	12.3	1.3	3.1	2.1	26.2	33.2	26.3	45.1	8.1	9.8	100.0	100.0	100.0
ミャンマー	41.9	49.7	46.9	12.6	6.6	5.5	1.4	1.2	1.0	28.8	24.5	16.6	16.2	16.2	17.9	100.0	100.0	100.0
ベトナム	51.2	42.1	35.8	11.1	25.2	32.9	2.9	19.4	26.2	20.8	14.6	15.1	15.8	17.6	15.8	100.0	100.0	100.0
ASEAN (10)	35.5	40.9	35.6	18.5	20.1	23.0	10.8	13.2	16.4	28.2	21.0	20.5	17.7	18.1	20.5	100.0	100.0	100.0

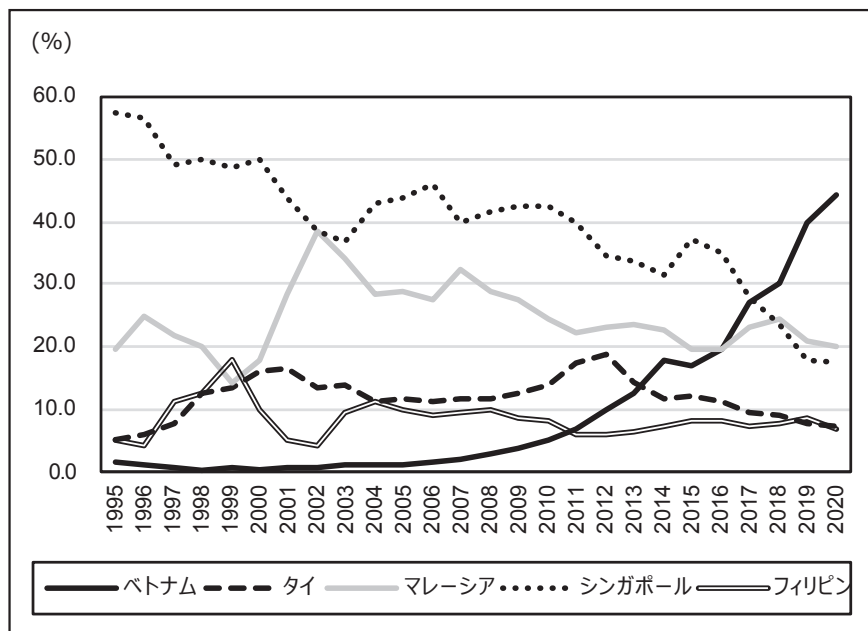
資料：GTAよりITI作成

中国のASEAN向けIT部品輸出の国別内訳の推移をみると、対ベトナム向け輸出は、リーマンショック前から立ち上げて、2014年にタイを抜き、2017年にはマレーシアを追い越し、2018年にシンガポールを上回った（図10）。

一方、中国の対ASEAN輸入に占めるシェアは、2020年でベトナムが26.2%、マレーシアが24.8%と、中国にとって最大の輸入先となった。ベトナムのシェアは2018年と比べて、一挙に5.1%ポイントも増加したことでベトナムがトップに躍り出た。2018年と比べて先発ASEAN国はいずれもシェアを低下させている。とりわけ、部品輸入、中でもIT製品の部品輸入でこれまでトップであったマレーシアはベトナムに追い抜かれた。2020年でベトナムのシェアが40.7%、マレーシアは33.0%、2018年ではベトナムが33.1%、マレーシアが35.1%であったが、2年間で対ベトナムIT部品輸入が急増した（表17）。

中国の財別対ベトナム輸入の特徴は、部品輸入依存度が高いことである。2020年でベトナムの輸入に占める部品の比率は、58.2%と6割弱を占めている。ベトナム以外に部品輸入依存度が高い国は、マレーシアとフィリピンである（表18）。情報機器の生産で、中国とベトナム、マレーシア、フィリピンとの間で緊密なネットワークが構築されているものと思われるが、中国のASEAN加盟国からのIT部品輸入の推移をみると、フィリピン、シンガポ

図10. 中国のASEAN主要国向けIT部品輸出の国別構成比の推移



資料：GTAよりITI作成

表17. 中国の対ASEAN輸入構成比（財・国別）

（単位：％）

相手国	加工品			部品			IT製品			資本財			消費財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	25.0	20.4	15.5	17.0	10.3	8.6	15.8	10.1	8.3	17.0	20.9	19.4	10.0	2.6	2.9	15.9	12.9	10.5
マレーシア	27.5	20.8	24.5	49.8	33.7	32.3	51.6	35.1	33.0	21.8	19.1	19.4	9.6	9.0	10.1	32.6	24.6	24.8
インドネシア	17.8	23.6	25.0	1.9	1.0	0.8	1.5	0.6	0.4	3.8	3.1	2.8	10.3	13.5	13.6	13.5	13.3	12.4
タイ	22.3	19.4	15.0	14.6	11.8	9.8	13.9	9.3	7.7	36.7	26.5	32.5	43.5	30.2	33.5	21.5	17.5	16.0
フィリピン	3.3	2.4	1.9	14.8	11.1	9.2	15.6	11.8	9.7	17.5	14.3	9.4	6.5	5.2	3.3	10.5	8.0	6.4
カンボジア	0.0	0.6	0.3	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.3	0.4	3.0	3.5	0.1	0.5	0.5
ラオス	0.2	0.6	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.5	0.7	0.4	0.6	0.7
ミャンマー	0.7	1.4	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	3.0	0.9	2.0	0.6	1.4	2.1
ベトナム	3.1	10.6	13.2	1.8	31.9	39.3	1.6	33.1	40.7	3.2	15.5	16.1	16.7	35.1	30.5	4.5	21.1	26.2
ASEAN (10)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：GTAよりITI作成

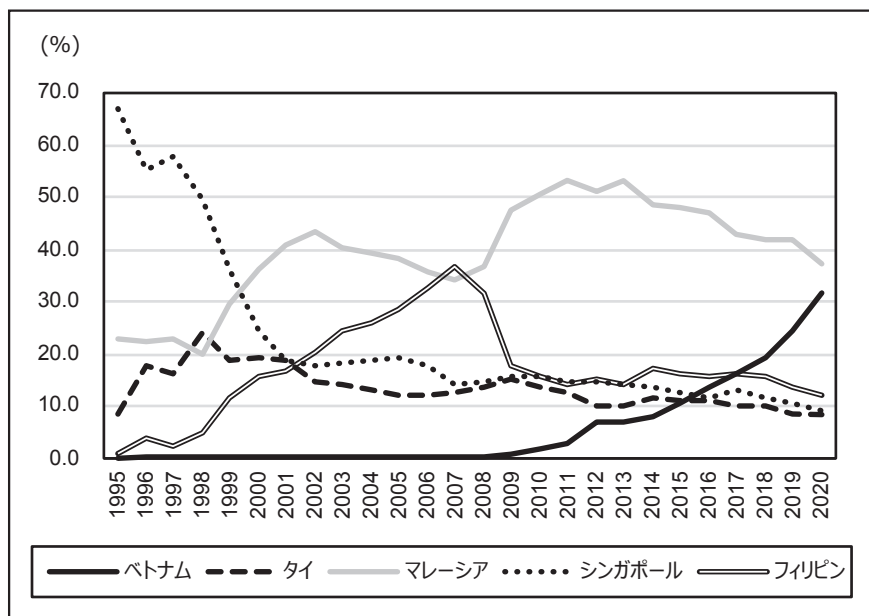
表18. 中国の対ASEAN輸入依存度（財・国別）

（単位：％）

相手国	加工品			部品			IT製品			資本財			消費財			総額		
	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020	2010	2018	2020
シンガポール	43.3	47.4	43.4	40.2	30.1	31.9	34.5	26.9	28.3	16.8	20.9	22.3	2.5	1.8	2.6	100.0	100.0	100.0
マレーシア	23.2	25.4	29.0	57.4	51.7	50.4	54.9	48.7	47.7	10.5	10.0	9.4	1.2	3.2	3.8	100.0	100.0	100.0
インドネシア	36.4	53.3	59.0	5.2	2.9	2.4	3.8	1.6	1.3	4.4	3.0	2.7	3.1	8.8	10.4	100.0	100.0	100.0
タイ	28.6	33.2	27.5	25.6	25.6	23.7	22.5	18.1	17.4	26.9	19.5	24.5	8.1	14.9	19.8	100.0	100.0	100.0
フィリピン	8.7	8.9	8.9	53.0	52.5	55.8	51.7	50.6	54.1	26.2	23.0	17.6	2.5	5.6	4.8	100.0	100.0	100.0
カンボジア	13.7	34.3	20.6	0.0	7.6	4.0	0.0	1.4	3.2	0.0	6.0	6.2	27.7	48.2	66.5	100.0	100.0	100.0
ラオス	17.6	28.2	32.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.2	0.1	0.0	2.8	1.4	0.5	6.6	9.4	100.0	100.0	100.0
ミャンマー	29.1	28.4	29.6	0.1	0.5	0.5	0.1	0.1	0.1	0.0	0.7	0.4	19.1	5.6	9.1	100.0	100.0	100.0
ベトナム	19.0	15.1	14.7	15.1	57.3	58.2	12.0	53.8	55.8	11.2	9.5	7.4	14.7	14.4	11.0	100.0	100.0	100.0
ASEAN (10)	27.6	30.0	29.3	37.6	37.8	38.8	34.7	34.2	35.8	15.7	12.9	12.0	4.0	8.6	9.5	100.0	100.0	100.0

資料：GTAよりITI作成

図11. 中国のASEAN主要国からのIT部品輸入の推移（国別構成比）



資料：GTAよりITI作成

ル、タイのシェアは低下傾向、マレーシアはリーマンショック後をピークにして減少傾向、ベトナムが唯一、増勢を維持している（図11）。

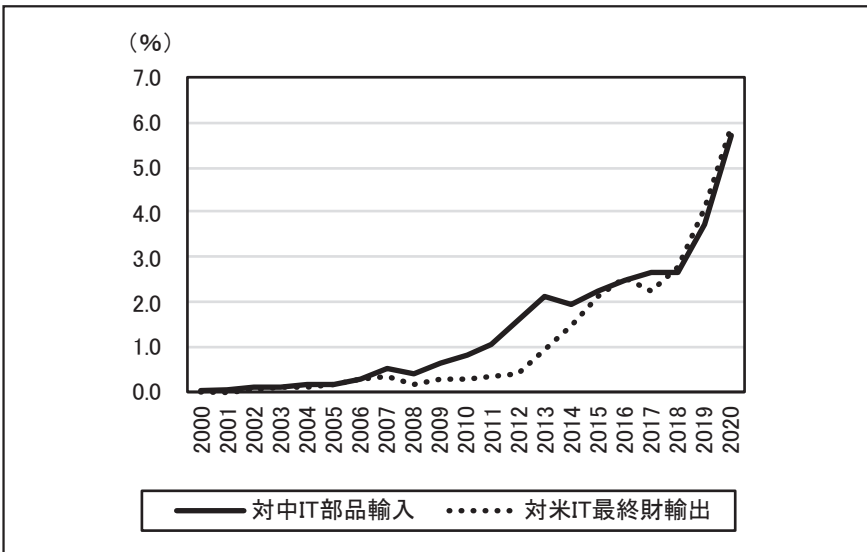
中・越・米貿易の連動性

2020年のASEAN貿易の中で、ベトナムは、対米貿易ではIT製品（資本財）や労働集約財を輸出し、対中貿易ではIT製品（部品）や加工品の輸入で他のASEAN加盟国を圧倒している。ベトナムの対米製品輸出と対中部品輸入には、連関性が指摘できる。

図12は、ベトナムの対中IT部品輸入（対GDP比）と対米IT資本財輸出（対GDP比）をプロットしたものである。対中IT部品輸入と対米IT資本財輸出とは高い相関関係が認められるが、2018年以降では、ともに同じ比率で急上昇し、2020年には対GDP比で6%の水準に拡大した。

ベトナムの衣類輸出は、米国との通商関係の正常化に伴って対米輸出が急

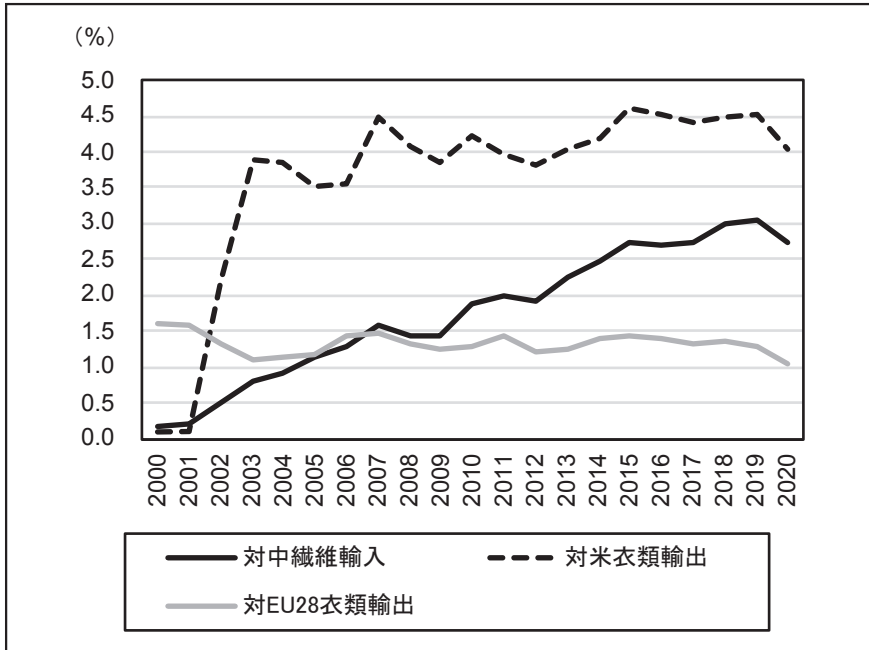
図12. ベトナムの対中（IT部品）輸入と対米（IT資本財）輸出（対名目GDP比）



注. 2020年GDPは予測値

資料：GDP：IMF；WEO（2021年10月）、輸出入：ベトナム貿易統計

図13. ベトナムの対中繊維輸入と対米・対EU衣類輸出（対名目GDP比）



注. 2020年GDPは予測値

資料：GDP：IMF；WEO（2021年10月）、輸出入：ベトナム貿易統計

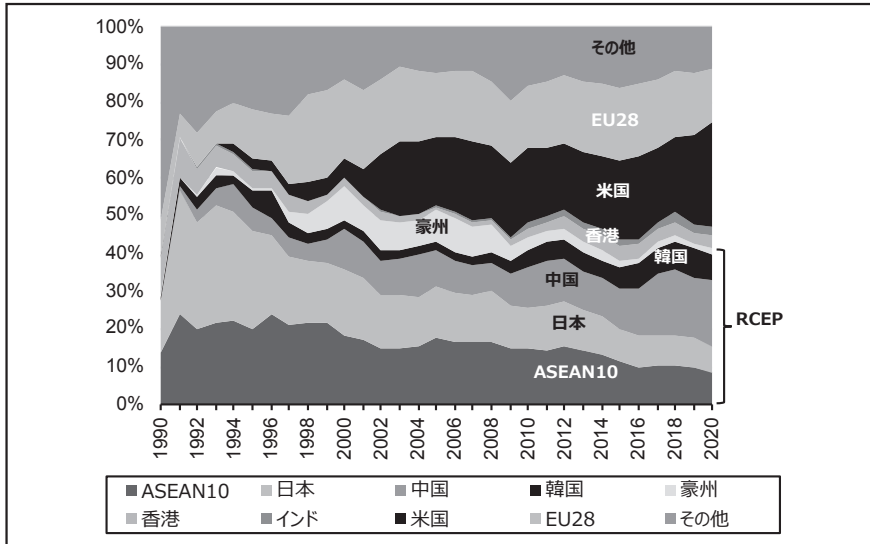
増した、2002年には対米衣類輸出の規模は対GDP比で4%弱に達した。以降4%台で推移。対米輸出の拡大に伴い、繊維の対中輸入が拡大を続け、2019年には対GDP比で3%に達している。

5. ASEAN貿易の新成長トライアングル

ASEAN加盟国の中で貿易の成長が著しいベトナムと貿易構造が似ているのがカンボジアである。カンボジアの貿易は、輸出では対米、対EU依存を高める一方で、輸入は対中輸入依存度（及びベトナムは対韓輸入依存度も高い）を高めている。同じメコン地域のミャンマーは、輸出・輸入ともに対中貿易依存度を高めており、ベトナム、カンボジアとはパターンが異なる（図14～16）。

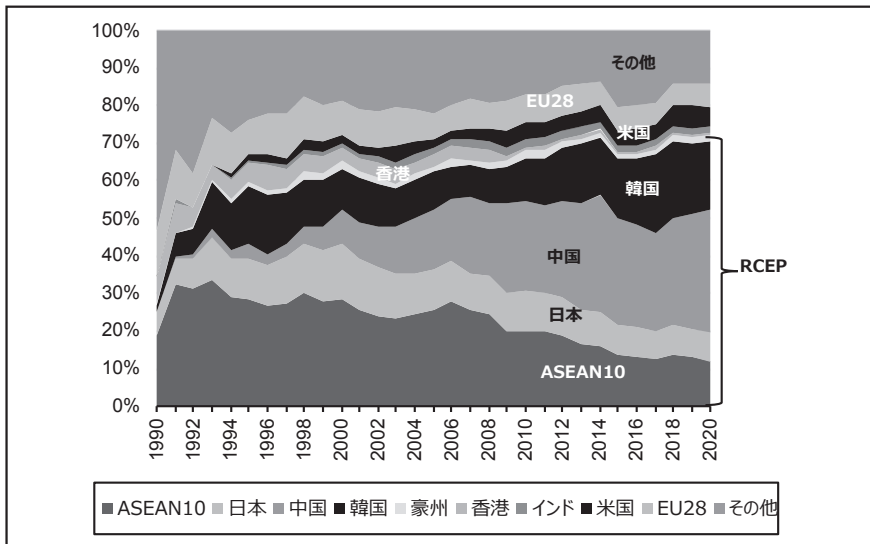
図14. ベトナムの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

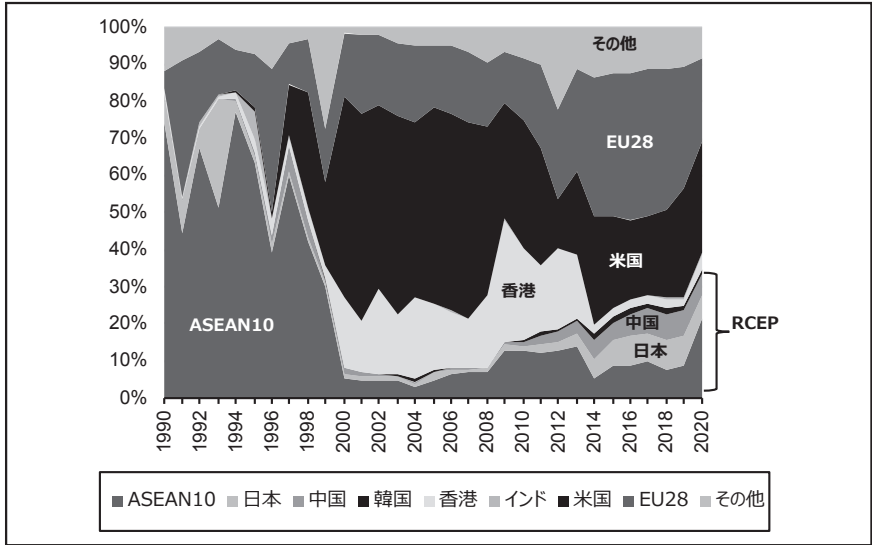
②輸入



資料：IMF；DOT（2021年11月）

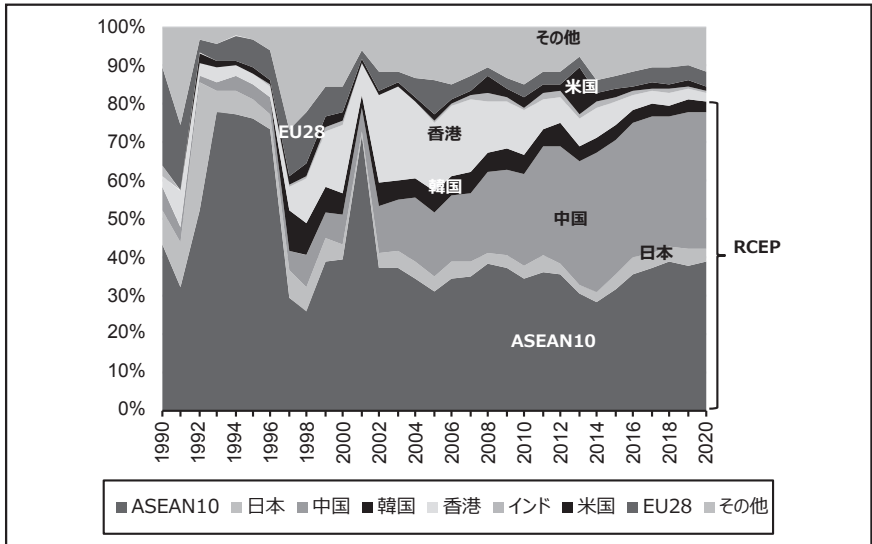
図15. カンボジアの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

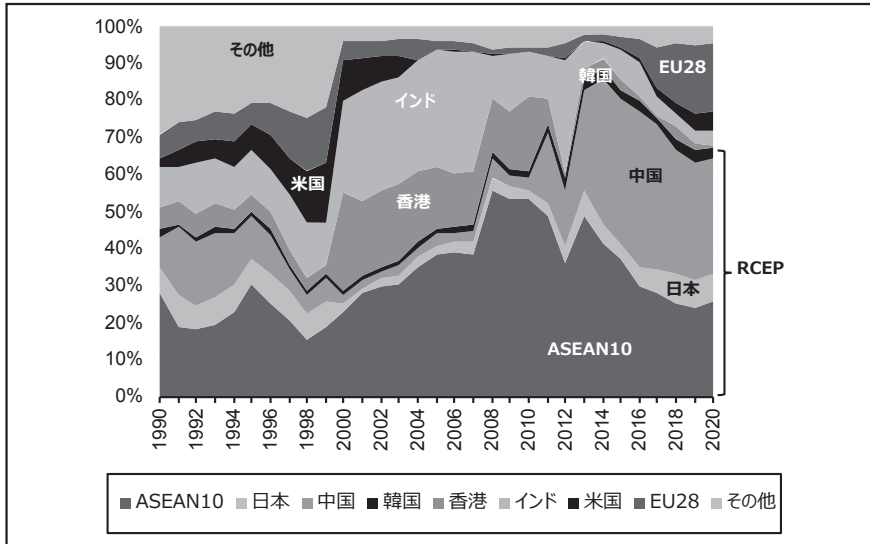
②輸入



資料：IMF；DOT（2021年11月）

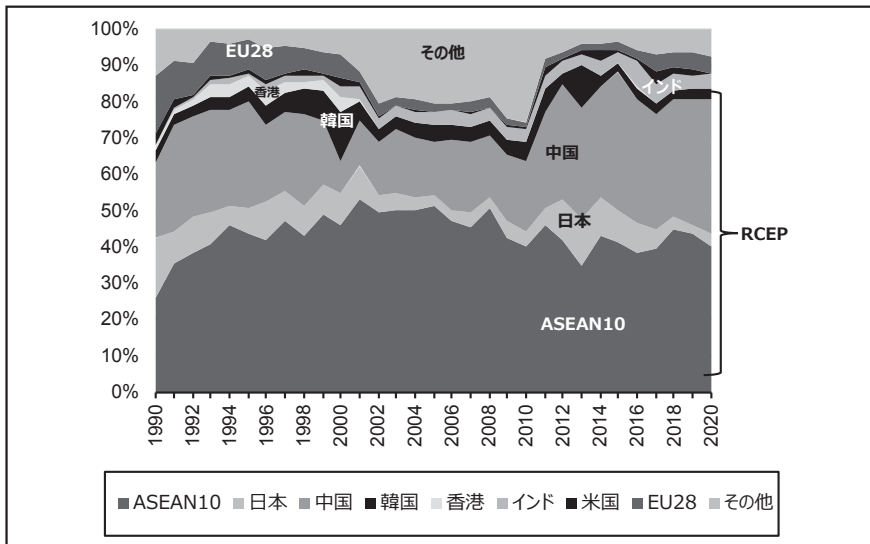
図16. ミャンマーの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

②輸入



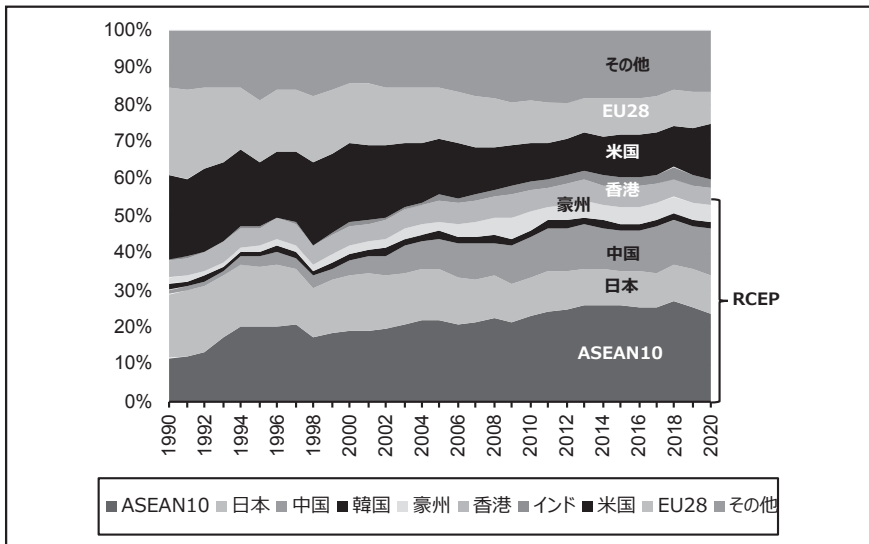
資料：IMF；DOT（2021年11月）

他方、ASEAN先発国のタイ、マレーシアの貿易は、輸出では対欧米輸出と対日輸出の比率が低下して対中輸出の比率が上昇、輸入でも対欧米、対日の比率が低下し、対中の比率が高まっている。また、日本、中国、ASEAN等15か国が参加しているRCEP（地域的な包括的経済連携協定）への貿易依存度が高いこともタイ、マレーシアの特徴である（図17～18）。

ASEAN貿易は、1980年代後半から1990年代にかけてASEAN先発国が、欧米市場への輸出と日本からの部材輸入を梃にして発展してきた。すなわちASEAN先発国を輸出拠点として対欧米製品輸出・対日部材輸入の三角貿易構造（トライアングル）が、ASEAN貿易拡大の原動力であった。ところが、リーマンショック後に、ASEAN貿易の原動力は、ベトナムを輸出拠点として対米製品輸出・対中（及び韓国）部材輸入という新たな成長のトライアングルに変質している。

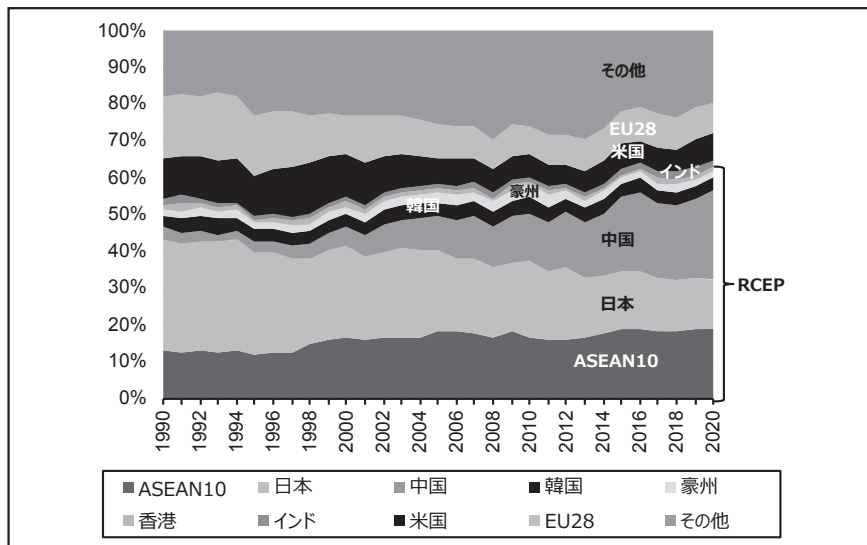
図17. タイの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF：DOT（2021年11月）

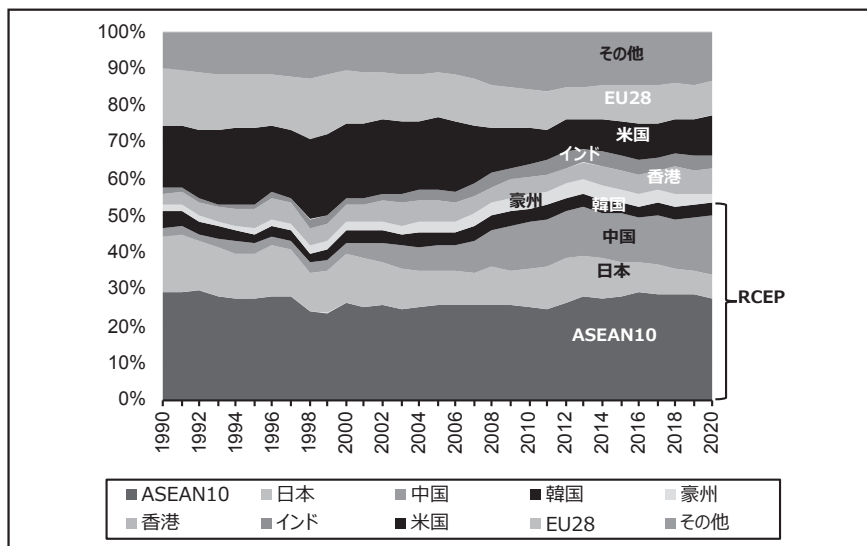
②輸入



資料：IMF；DOT（2021年11月）

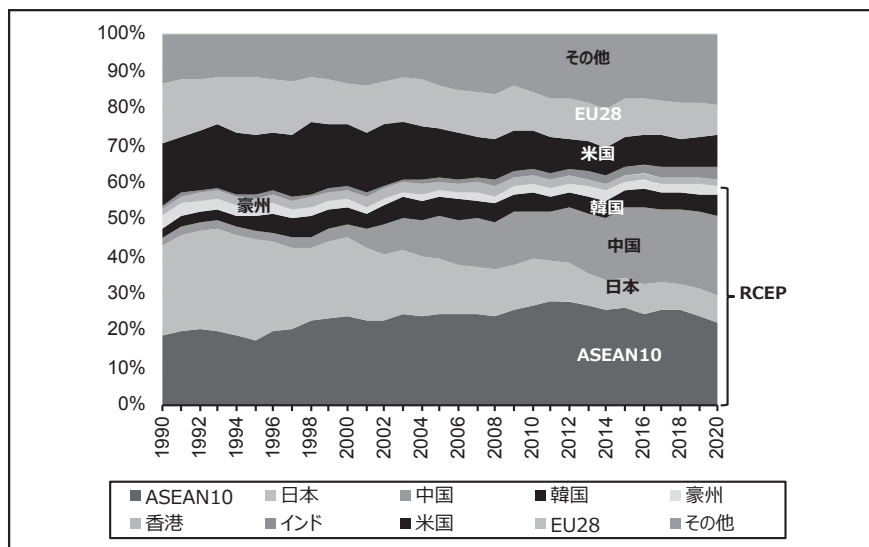
図18. マレーシアの国・地域別貿易構成比の推移

①輸出



資料：IMF；DOT（2021年11月）

②輸入



資料：IMF：DOT（2021年11月）

ASEANの貿易黒字を稼ぎ出すベトナム

ASEAN貿易の成長トライアングルは、貿易収支面でみると、対日赤字を

表19. ASEAN各国の貿易収支戻

①2010年

(単位：10億ドル)

国名	城内	城外	日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	世界計
シンガポール	32	9	▲ 8	3	▲ 4	4	▲ 13	▲ 3	41
マレーシア	6	28	0	4	▲ 1	4	1	5	34
インドネシア	▲ 6	28	9	▲ 5	5	7	5	7	22
タイ	14	▲ 5	▲ 18	▲ 3	▲ 5	2	9	8	8
フィリピン	▲ 5	▲ 3	0	1	▲ 2	▲ 0	1	3	▲ 9
カンボジア	▲ 1	2	▲ 0	▲ 1	▲ 0	▲ 0	2	1	1
ラオス	▲ 2	▲ 0	▲ 0	0	▲ 0	0	0	0	▲ 2
ミャンマー	2	1	0	▲ 1	▲ 0	1	▲ 0	0	3
ベトナム	▲ 6	▲ 7	▲ 1	▲ 13	▲ 7	▲ 1	10	5	▲ 13
ブルネイ	▲ 0	7	4	0	1	0	▲ 0	▲ 0	6
ASEAN計	34	58	▲ 15	▲ 14	▲ 12	17	16	25	92

資料：IMF：DOT（2021年11月）

②2018年

(単位：10億ドル)

国名	域内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	43	▲ 1	▲ 2	1	1	5	▲ 10	▲ 10	42
マレーシア	15	14	1	▲ 9	▲ 1	2	6	3	29
インドネシア	▲ 7	▲ 11	1	▲ 18	▲ 1	9	8	2	▲ 18
タイ	23	▲ 21	▲ 11	▲ 20	▲ 4	3	13	2	1
フィリピン	▲ 16	▲ 25	▲ 1	▲ 13	▲ 9	▲ 1	3	0	▲ 41
カンボジア	▲ 6	1	0	▲ 5	▲ 0	▲ 0	3	4	▲ 5
ラオス	▲ 2	0	0	0	▲ 0	▲ 0	0	0	▲ 2
ミャンマー	▲ 4	2	1	▲ 1	0	▲ 0	0	2	▲ 3
ベトナム	▲ 7	14	▲ 0	▲ 24	▲ 29	2	35	28	7
ブルネイ	1	2	2	▲ 1	1	0	▲ 0	▲ 0	2
ASEAN計	38	▲ 26	▲ 8	▲ 90	▲ 43	20	58	33	13

資料：IMF；DOT（2021年11月）

③2020年

(単位：10億ドル)

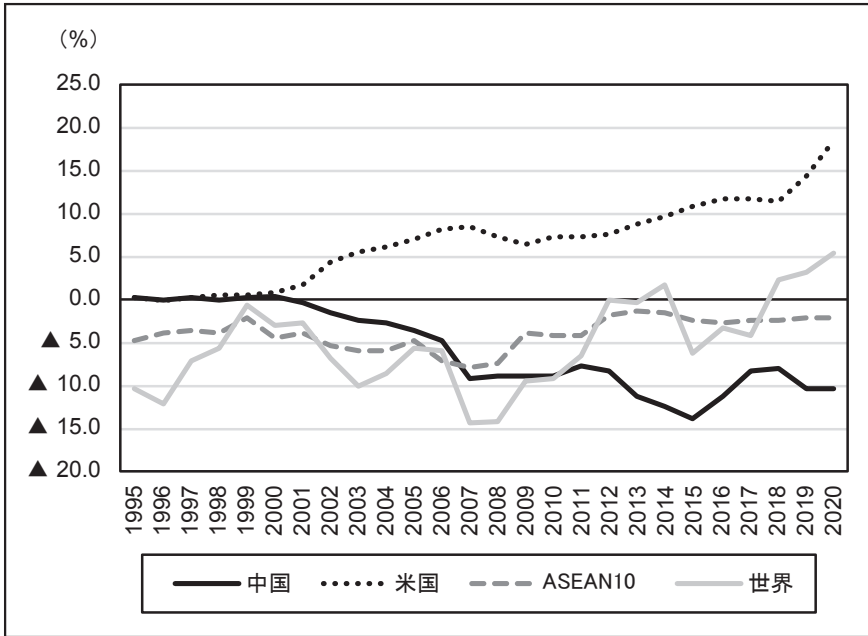
国名	域内	域外							世界計
			日本	中国	韓国	インド	米国	EU28	
シンガポール	11	15	▲ 0	3	1	3	4	▲ 7	27
マレーシア	23	20	0	▲ 3	▲ 2	1	9	7	44
インドネシア	7	13	3	▲ 8	▲ 0	7	10	3	20
タイ	16	7	▲ 5	▲ 21	▲ 3	1	19	3	22
フィリピン	▲ 14	▲ 12	1	▲ 11	▲ 4	▲ 1	3	0	▲ 26
カンボジア	▲ 4	2	0	▲ 6	▲ 0	▲ 0	5	3	▲ 2
ラオス	▲ 1	1	▲ 0	0	▲ 0	▲ 0	0	0	▲ 0
ミャンマー	▲ 3	2	1	▲ 1	▲ 0	0	1	2	▲ 1
ベトナム	▲ 7	26	▲ 1	▲ 35	▲ 28	1	63	24	18
ブルネイ	1	1	2	1	0	0	▲ 0	▲ 1	1
ASEAN計	29	74	0	▲ 81	▲ 38	12	115	36	103

資料：IMF；DOT（2021年11月）

対米、対EUの黒字で相殺する構造であったが、これが対中赤字、対米黒字に変わっている。2020年の貿易収支では、ASEANの対中赤字が810億ドルに達し、最大の対中貿易赤字国はベトナム、次いでタイ、フィリピンと続いている。また、対韓貿易赤字も380億ドルに膨らんでいる。対韓貿易赤字の大半はベトナムによるものである。

一方、2020年のASEANの対米黒字は、1,150億ドル、このうちベトナムの対米黒字が630億ドルと過半上を占めている。次がタイの190億ドルである。また、ASEANの対EU貿易黒字は、360億ドル、このうちベトナムが280億

図19. ベトナムの貿易収支尻（対GDP比）



資料：IMF；DOT（2021年11月）

ドルを占めている。ASEANの域外貿易黒字の稼ぎ頭は、マレーシアからベトナムに交代している（表19）。

ベトナムの貿易収支尻は、2014年黒字転換したが、すぐに赤字に転落した。2018年に再び黒字に戻り、2019、2020年と黒字幅を拡大させている。これは主に、対米貿易黒字の拡大によるものである（図19）。2020年のベトナムの財別貿易収支尻は、対中貿易では、加工品、資本財で大幅赤字、対韓貿易では部品で大幅赤字を計上する一方で、対米貿易では消費財、資本財で大幅黒字を計上している（表20）。

表20. ベトナムの貿易収支戻 (2020年)

(単位: 10億ドル)

財	ASEAN 域内	ASEAN 域外						世界計
			日本	中国	韓国	米国	EU (28)	
素材	▲ 1.2	▲ 12.6	▲ 0.2	1.9	0.5	▲ 2.8	0.7	▲ 13.8
加工品	▲ 2.8	▲ 43.6	▲ 3.7	▲ 21.1	▲ 10.4	28.0	▲ 0.9	▲ 46.4
部品	▲ 2.9	▲ 26.1	▲ 3.9	▲ 7.3	▲ 21.4	4.3	▲ 0.1	▲ 29.0
資本財	0.4	349.0	▲ 1.2	▲ 11.7	▲ 1.1	22.7	13.2	35.3
消費財	▲ 0.7	74.5	77.0	23.0	4.6	36.9	12.2	73.7
総額	▲ 7.3	27.5	▲ 1.0	▲ 353.0	▲ 27.7	63.3	24.7	201.0

資料: ベトナム貿易統計よりITI作成

6. 展望: 米中対立の長期化と脱中国の加速化

中・越・米が連動する貿易トライアングを構築させた一因は、過度な対中貿易依存リスクを回避する動きである。これは、生産拠点を中国以外の国に移管するチャイナ+1と呼ばれている。世界の工場、中国が賃金上昇や沿海部での労働力難で輸出拠点として陰りが見え始めた2000年代半ば以降、ベトナムは、チャイナ+1の最有力候補と見られていた。

しかし、ベトナム国内ですそ野産業が十分に育っていないことが、製造業の対ベトナム進出の難点となっていた。部材の現地調達が難しいことから、大規模な量産型セットメーカーのベトナム進出は、ごく一部の企業を除けば、見送られてきた経緯がある。こうしたすそ野産業が未整備なベトナムで2009年に携帯電話の生産を開始したサムスン電子の進出は、生産拠点としてのベトナムを再評価につながった。

また、ベトナムのTPP参加表明(2008年)、中国・ASEANのFTA(2005年)等の貿易自由化の動きも指摘できる。ベトナムは、2008年11月にペルーで行われたAPEC首脳・閣僚会議の際にオーストラリア、ペルーとともにTPPに参加する旨を表明した。ベトナムがTPP参加を決めた理由の一つは、貿易と外国投資の促進である。特に、最大の市場である米国の関税の引き下げは、輸出の拡大のチャンスである。また、TPPへの参加を通じて多

国籍企業のサプライチェーンにベトナムが参画することを狙った。ベトナムのTPP参加表明は、中国企業、特に繊維産業のベトナム投資を誘発した。TPPに参加していない韓国企業にも影響を与えた。

中国・ASEANのFTAによる関税撤廃も、中国とベトナムの貿易を促進している。特に、中国の繊維メーカーは、投資したベトナム工場から中国に綿糸を輸出し始めた。中国の綿糸輸入は、インドに代わってベトナムが最大の輸入先となった。中国はベトナムに綿織物を輸出し、ベトナムは中国に綿糸を輸出する水平分業が、繊維貿易で始まっている。

韓国企業が、中国生産リスクを回避するために、ベトナムに生産拠点を移す脱中国に舵を切っていることもASEANの新成長トライアングルの構築に需子している。中国は、韓国の高高度ミサイル防衛システム「THAAD」配備に対して、限韓令と呼ばれる報復措置を行った。韓流スターの中国国内からの締め出し、中国人旅行客の韓国への渡航制限、韓国製の光ファイバー商品への反ダンピング関税を5年間延長、韓国製の自動車のバッテリーに対する補助金が制限されるなど、韓国が得意とする家電や自動車製品にも狙いを定めて揺さぶりをかけた。韓国企業は、対中依存度を軽減することで、限韓令の影響を軽減させようとしている。サムスン電子やLG電子は、ベトナムを国内、中国拠点に次ぐ3番目の生産拠点として位置付けている。

こうした動きに加えて、米中貿易摩擦の激化、とりわけ2018年に米国が発動した対中追加関税措置が、ベトナムを対米輸出拠点とする動きを加速化させた。米中の対立は、貿易から技術、通貨などに広がり経済戦争の様相を見せる一方で、台湾海峡を巡る地政学的リスクを高めており、中国に信頼できるサプライチェーンの輸出拠点を置くリスクが一層高まってきている。脱中国生産の受け入れ先としてASEAN、中でも中国の産業集積地と隣接するベトナム等のメコン地域に生産拠点を移管する動きは持続しよう。

ベトナムの限界

他方でチャイナ+1としてのベトナムにも限界が指摘できる。ベトナムは、2021年に入って、コロナ対策で後手に回り、輸出拠点としてのベトナム

に疑問符をつけるような事態を招いた。ベトナムに限らず、東南アジア諸国では、2021年4月春先から、第4波の市中感染が急速に広がり、製造業の生産能力が大きく損なわれた。

その中でベトナムの新型コロナウイルス感染対策は成功したと評価されてきた。コロナ禍が始まった2020年には、ロックダウン（都市封鎖）や国営施設での大量隔離といった封じ込め措置が奏功し、欧米諸国向けに電子製品、衣類などを引き続き輸出していた。ところが、第4波では収束の兆しが見えなかったことから、工場の閉鎖などの操業規制や移動制限などの厳しい規制が導入された。ベトナム政府は、感染率が極めて高い一部地域では、ウイルスの拡散を防ぐため、従業員に職場での食事・睡眠・労働を義務づける「スリー・イン・ワン指針」を課した。こうした規制によって、ベトナムを輸出拠点としてきた欧米ブランドメーカーは、製品が調達できない苦境に陥った。コスト高や米中貿易戦争に伴う関税で中国から生産拠点を移した企業の中には、ワクチンを巡る問題を受けて、ベトナムにどこまで頼れるのか再考する動きも出ている^{注3}。

中長期的に見ると、ベトナムの伸びしろには限界がある。ベトナムの国土は、丁度、中国の沿海部を切り取った形と似ている。S字型に伸びるベトナムの地形は、南北方向（縦長）に約1,650km、本土の最も広い部分で約500km、最も狭いところで約50km、海岸線は総延長3444kmにわたる。人口規模はベトナムが9,850万人（2021年）と1億人弱、これに対して中国沿海部には5億人超と中国の5分の1以下である。中国沿海部でも割安な労働人口の供給を持続的に供給することは難しく、賃金も上昇し始めたことで、製造拠点は内陸部に移管した。現在ベトナムは、15～64歳の生産年齢人口がそれ以外の人口（従属人口）より多い「人口ボーナス期」の最中にある。この最も活力のある時期に高成長が期待できるが、この盛りの期間は長くは続かない。また、部品産業などのすそ野産業を自国内で育成することにも、依然として課題を残している。こうしたベトナム一国の限界を補うのが、ASEAN加盟国との生産分業の促進、とりわけメコン地域における生産ネットワークの構築である。ASEANの経済統合の真価が問われる。

参考資料

大木博巳「チャイナ+1はベトナム、メキシコ、台湾～米国の対中追加関税措置の影響～」ITIフラッシュ 472、2020年9月7日

「中・越・米貿易の新成長トライアングル～米中対立のエッジに乗るASEANの新輸出大国ベトナム～」ITIフラッシュ 501、2021年12月29日

大木博巳（2020）「コロナ禍と対中依存リスク～中国をサプライチェーンのハブにしたのが賢い選択だったか～」、『季刊国際貿易と投資120号』

大木博巳（2016）「メコン地域におけるクロスボーダー生産分業の胎動～メコンはチャイナ+1、タイ+1の機会を生かせるか～」、『季刊国際貿易と投資103号』

注

1 「シンガポール、高付加価値型活動に注力し、交易拠点としてのポジションを確立」The Business Times 2020/07/20

2 NNA「中国リスクで供給網見直しへ 電子の輸出・再輸出活況（下）」2020/10/29
<https://www.nna.jp/news/show/2109850>

3 「【コラム】ロックダウンでベトナムのサプライチェーンが脱中国依存の試金石に」
ジェトロ 地域分析レポート 2021年11月10日